其美的嗜好を進歩せしむること是なり。第二に急務とすべきは、尤も平民的なる文學界を設立するにあり。其初は二三同志相計りて、或は作物の批評を試み、或は自家の見解を述ぶるも可なり。而して漸次團體を擴張して、堅固なる文學界を組織すべし。第三に實行すべきは、學者たる人が、其學び得たる所、或は創立したる學理を、愼重なる態度を以て公にせむこと是なり。文壇の發進を務めて得たる名譽は永却に輝かむ。只利のために自己の名譽を欲する者は、氷上に我が姓名を錄さむとする愚者と謂はざる可らず。

（三十四年二月新文藝）

矛盾錄

◉人には矛盾ありと言ふを誤解して、矛盾あるが即ち人間なりと思へる人々こそあさましけれ。

◉吾は紳士なり、吾は狗兒とは言を交ふるを屑とせずと言ふ人にして、非紳士の醜態を顯す半通人あり。これ矛盾の愛すべきもの。西洋通、英國文學通と自稱して、紳士の眞義を知らず。乞ふ健腦丸にても服用して自愛せよ。

◉佛語を知らずして、佛文學を論じ、獨逸語を知らずして、ニーチェを評するは非なりと言ふ論者が、埃及を論じ、佛敎を論じ希臘を論じトルストイを評し、シエンキヰチを評して傲然たるは、矛盾の大なる者にあらざるか。若し夫れ然らずんば其人は、埃及古語、梵語、希臘語、露語に精通せる言語學者ならざる可からず。

◉同樣の論者が、邦語にてニーチエとやらを紹介せむとするは、既

に見事なる矛盾に非ずや。獨逸語を知らざる日本讀者は、卿等の筆法に依れば卿等の心勞絶大なるに拘らず、遂にニーチエを解釋すること能はざらむ。若し夫れ獨逸語を解する讀者に向つて紹介すと言はゞ、何ぞ事々しく邦文を以て貴重の紙面を費すの必要あらむや。たゞ一言彼の國にはしか〳〵の天才あり。就きて讀めよと言はば事足りなむ。

◉學問を無視し、聞くを厭ふニーチエ大師を崇拜しながら、他人に向つて、汝は學問なきが故に、汝は十九世紀の思潮を知らざるが故に、汝は外國文學に精通せざるが故に、議論するに足らずといふは美しき矛盾にあらずや。

◉論理を無視し、科學を排斥し、歴史を破壞し且つは文明を否定する論者が、己が說を論理形式に依つて記述し、自說の爲に科學的事

實を採り、歴史を回顧し、文明の利器を用ふるは、矛盾の最も大なるものにあらざるか。

◉眞理の眞理とすべき莫し。善惡の差別は、畢竟迷妄の相なりと主張す。これ一切の憑據を毀て、しかも己が理性の活動に依つて新憑據を造りたるもの、而してこれに確證を附與せず。自殺說とは、これをこそ言ふべけれ。

◉絶對的個人主義を主張して、本能性の發展を奬勵しながら、而も他人に向つて、義務を說き責任を負はしむるは、撞着の完全なるものなり。傳來の道德說を破つて、而も他人は舊說に從ふべしと薦む吾人孰か眞意なるを看取し難し。

◉今は形式主義、作法主義、習慣主義、證典崇拜主義、人爵主義、學閥主義、本能壓迫主義の世の中なりと慨嘆しながら、而も形式、

作法、證典、人爵、習慣學閥を標準して、評論の筆を揮はむとするは矛盾の大なるものに非ざる乎。

◉主義を立て、實行を忘る。矛盾せるかな、愚なるかな、拙なるかな、怯懦なるかな。言行一致、理論行爲の一致、これ人の勉むべきものにあらざる乎。實行の覺悟なくして、徒に奇言を奇き散らすは跛者の富士登山を說くに異らず。

◉自由本能主義は、人間をして太古の狀態に還らしめむとする者なり。然れども現在の人間はいかなる程度まで太古に歸り得べきか。其點の研究なくして、複初說を主張す。矛盾と言はむよりは、寧る拙劣なり。

◉本能といふ文字を、曖昧に使用して、幾多の遁げ道を設け置く。これ自己を輕からしむるものなり。自我の確立と自由とを主張しながら、自己を墜下せしむ。矛盾これより大なるは莫し。

◉矛盾は進步の動機なり。然れども矛盾を矛盾と識つて、其の調和を計ればこそ發達進步あれ。その矛盾即進步、撞着即天才と觀じて俗流を駭かさむとするが如き徒は、義賊の名の下に、善惡チャンポンの行を爲して得意がる野蠻人と、何の異る所かあらむ。

（三十四年十月太平洋）

洋畫界の病弊

若し夫れフオンタネジー氏をして、現今の洋畫を觀せしめなば、彼れは其の進境の著大なるに一驚を喫すべし。げに吾が畫界に於ける洋畫の進步や大なり。世人は、第五回博覽會に於ける洋畫の失敗

を觀じて、直に洋畫の不振を說き、其の未熟なるを痛罵せむとす。然れども該會場內は、不幸にして吾か洋畫界を代表すべき大家の筆を以つて飾られざりき。斯道の大家と目せらるゝ諸氏が、其の靈筆を振はざりし罪は、固より辯解する能はざる所なりと雖も、而も該會場內に於ける洋畫を以つて、現代の油繪水彩畫を非難するは正鵠を失したるものと謂ふべし。吾人は多言すまじ、洋畫を非難する諸氏よ、多辯を弄する前に當りて、今回上野公園內に開かれたる白馬會を看よ。吾が洋畫界の中心とも稱するに足るべき白馬會の展覽會は博覽會場裡に於ける洋畫の大不名譽を雪ぎて餘あるものなり。吾人は白馬會其の物が、往年に比して、幾許の進步を示したりやを測る前に、先づ、今回の展覽會が外人の前に晒したる大恥辱を消滅せしむるに足るべき程の效果を、收め得たるを怡ぶ者なり。

然れども其の展覽會は、果して幾許の滿足を、吾人に與へたる乎。否、果して幾許の希望を吾人に與へたる乎。念ふに今回の陳列は、博覽會の不名譽を雪ぎつといふ消極的結果の外に、何等將來の光明をも示さざるにあらざる乎。何となれば、吾人の看る所を以つてするに、該會には二病弊の潛在するありて、これ軈て其の進步を阻害する團體にあらずやと信ずればなり。白馬會は、吾が洋畫界を代表するものなり。其の團體にして今や重患に罹る。これ洋畫界全體を腐敗し、衰頽せしむる原因にあらざるか。所謂病弊とは何ぞ、第一に曰はく、極端なる寫實主第、第二に曰はく、西洋の模倣これなり。

吾人は決して寫實主義を排斥する者にあらざるなり。否、寫生を基礎として、始めて繪畫の進步見るべきものあるを主張す。然れども寫實主義其の物を以つて、作畫の頂點なりといふを擯斥す。何と

なれば、是れ第二の造物主と稱すべき藝術家の本領を滅するものなればなり。然るに白馬會場内を觀ずれば、寫生に安んぜむとする傾向嘹々たり。出品點數は四百五十點に近しと雖も、要するに、寫生の巧拙を競爭せむとする者の多數を占めたるは、これ這般の傾向を示すものと謂つべきなり。獨り白馬會のみに非ず。紫玉會の如きも亦此の病弊に感染したるを看る。

畫家の本領とは何ぞや。吾人は、やかましき哲學論、或は美學論に依りて、其の本領を云々するを好まずと雖も、そが單に裝飾を主とするものにもあらず、又單に技術の巧妙精微を誇るに在らざるは、誰人も首肯する所ならむ。いかなる畫家と雖も、畫家たるの本領は自然界以上に登つて、或る物を示さむとするか、或は自然界を模寫する内にも、造物主の深大奥妙なる意義を啓示して、之れを看取し

得ざる凡俗を利益せむとするに在るは、決して拒まざる所ならむ。

人類として、花に對し、月を眺めて、無上の快樂を覺ゆる所以は何故ぞ。これ花月に對して、何等かの解釋を下すが故にあらずや。花の赤き、月の青き、これ獸類、鳥類、蟲類と雖も、均しく感ずる所なりと雖も、人間は是れを觀じて快感を起すと共に、其の以上に何等かの解釋を下すを常とす。野の白百合花は、ソロモンの榮花よりも、更に大なる榮花を示したるに非ずや。然るに白馬會の一派は吾人の感性に觸れたる所を寫して、能事終れりとす。山川草木より人物に至るまで、皆な吾人の感性に觸れたる所を描寫するに止まりて其の以上の意味を與へず。若し夫れ是れを以て繪畫の頂上なりとせば、吾人ま、寫眞展覽會を以つて、該會に優ること數等の上に在りと謂はむ。

讀者試に和田英作氏の『思郷』を觀ぜよ。單に技術の點より看れば、一の問然すべき點はなかるべしと雖も、やがて其の畫題が、果して是に適當せるや否やを疑はむ。これ山川萬里を隔てたる異郷に在る本邦の婦人を寫したるものなりといふ。然れども其の悲痛は、何れの點に於いて看取するを得べきか。海洋萬里を渡航して、東西も覺束なき土地に客となりし一婦人の心裡は、斯くの如き態度容貌を以つて寫し終れりとなすべきか、『思郷』といへる畫題と、實際の繪畫とは、果して一致和合せるか、若しこれに換ふるに、『美人』とするも觀者は何等の不平をも鳴さざるにあらざるか、吾人は此の繪畫に、『美人沈思』の畫題を與ふるすら、甚しく不適當なりと信ずるものなり。何となれば、其の中には、何等の深意をも發見する能はざればなり。固より其の眉間には多少の悲調を現したりと雖も、『思

郷』と稱すべき程の大なる悲哀は、何れの點にも認識するを得ざるなり。

苟くも藝術家として、一事一物に對するや、何事かの意味を看取せずんばあるべからず。繪畫は空間的に或物を再現するものなりと雖も、吾人の感性に印象したるまゝを寫して以つて能事終れりと爲すべきに非ず。音曲に於いて、單に吾人の聽覺のみを樂ましめむとするは、其の上乘にあらざるか如く、繪畫に於ても、吾人の視覺のみの快感を目的とするは未だ藝術の本義を解ぜざるものにあらずや。古今に獨歩する繪畫を看よ。方寸の裡と雖も、如何に幽邃微妙の意義を含有するかを。また同會場内に陳列せられたるミレーの模寫『落穂拾ひ』を見よ。數回看るに從つて、深大なる意味の潜在するを感ずべし。又日本畫が、繪畫としての生命を維持する所以は、線の中

に、或る説明を現すか故にあらずして何ぞ。

空間の物體を現すといふ點より觀察すれば、日本畫には、數ふべき程の價値あらざる可しと雖も、時間的意味を表すといふ方面より觀すれば、善く藝術の本意を體したるもの也。意味の深淺は、理想畫又は表象的繪畫にのみ限られたるものに非ず。一の人物、一の花、一の樹木、一の草を寫す上に於いても、畫家其の人の之れに對する解釋なかる可らず。然るに白馬會一派は、寫實を尚ぶの弊として、所謂モデル其の儘を公にして、繪畫の本領は、此の以外に覓むべからず、否、これを覓むる者は、謬見に迷へりと言はむとす。

モデルとは何物ぞ。其の價値果して幾許ぞや。モデルには二種あり。實際的其の一なり。假裝的其の二なり、若し夫れ實際的モデルに就きて、之れを寫さば、恐らくは拙技の人と雖も、善く大作を物

し得べし。『思郷』を例とせむに、若し實際に、遠き故郷の空を眺むる美人を例とせば、顔面の微細の點に至るまで、また態度の一細端に至るまで、沈痛なる悲哀の發動するを觀ずべし。然れども一たび『思郷』なる題の下に、一の美人を形造らすればとて、其の容姿には、何等の意味もあらざるべし、これ其のモデル其の物の胸底には故郷を慕ふの悲あらざれば也。否、假令實際に郷土を念ふ婦人なりとも、これを捕へて、モデルたらしめむとすれば、婦が心一轉して假裝的となり、遂に眞情の發現を隱蔽するに至らむ。

モデルを用ふるも効なしとは言はず。然れどもモデル其物を描寫して、畫家の能事終れりといふは大なる誤謬なり。畫家はモデルを利用したる後、更に其の想像に依つて、意義の發現に勉むる所なかるべからず。然るに白馬會の陳列品には假裝的モデルの行列あるの

み、外行きの顔したる人物あるのみ、茶の湯の席に坐せし美人あるのみ。體操練習中の女學生あるのみ。若しも此れ等の人物にして語らば、男は必ず『御座ります』女は必ず『遊ばせ』の切口上を用ゐむ。

寫實主義は一の階段たるのみ。然るに多くの畫家は、これを以つて製作の目的となし、平板無味なる繪畫を造つて、敢て此れを繪畫本來の面目なりと主張せむとする者の如し。諸氏は擬古主義を排斥しなから、而も科學的思潮を誤解して、假裝的モデル主義を固持す裝飾的美術としての繪畫ならば時間的意味なきものにて足れり。然れども裝飾より離れて繪畫を作らむとする場合に當りて、尚ほ空間的意味の外に、深義の發現を計らざるか如きは、畢竟するに洋畫界の進歩を阻害するものなり。

第二の病弊は、依然として西洋の模倣なること是なり。固より技

術の上に於いて、彼れを學ぶは當然なりと雖も、內容の上に於いてすら、歐洲を師とするは、餘りに意屈地なき方法にあらずや。四百餘點の出品中、日本的本能性の活動する繪畫果して幾許ぞ。吾人は日本の精神的活動を究むるものなり。必ずしも宗教、道德等、高尚なる精神を發現せよと言はずと雖も、日本的本能性を全幅の裡に表して、日本の油繪を造るべきが、當代の洋畫家の責任に非ずや。技術は單に方法たるのみ。油繪具が、日本的思想を表想するに不適當なりとの理由無き以上は、是れに依つて、日本の美術界に、一新天地を啓くこそ急務なれ。伊國、佛國、獨國、英國、露國等の繪畫が一見して判別し得る所以は、各が自國の本能性を發現するに由る。根柢淺き西洋の思想を拖きて執筆すればとて、何程の効果をか起し得べき。

吾人は今の洋畫界に通じて、此の二大病弊の潜伏するを遺憾とす。國民の精靈、闇黒裡に彷徨して、生死の淵に痛嘆するの時に當りて、藝術家の名を有する者が、皮相の模寫に甘んじ、燒き直しの繪畫を作つて恬然たるは、餘りにお坊樣的たるにあらずや。

（三十六年十一月太陽）

寫生主義の誤用

（白馬會に就いて）

秋季の白馬會は開かれたり。出品點數四百に近く、前回に比して稍活氣多きを見る。黒田清輝氏の作、只三四の小品あるのみなるは、遺憾なりと雖も、今や佛國に在りて、技術を研きつゝある和田

英作氏、並に同國より歸りたる岡田三郎助氏の出品、甚だ多ければ以て寂寥の感を減じ得べし。吾人は未だ精細に該會場を眺めたるにあらざれば、茲に其の大體に就きて論ずるは、僭越の譏を免れざる可く、又言ふ所、正鵠を失することもあらむ。

吾人の第一に感じたるは、本回の大作は、皆な失敗の作たること、是れなり。『水難救濟』といひ、『收獲』といひ、『勸行』といひ、『李鴻章』といひ、孰れも平凡無味の作にして、何等の意味をも語らず。吾人は、此れ等筆者の技倆は未だ大作に向ふまでに圓熟せずとなす。俗に言ふ「書きこなす」ことは、畫布の大さ以上の技術あるにあらずんば能はず。見よ此れ等の作は、皆な調和一致を失ひたる者のみならずや。畫布の大、或は人物の多を以て觀者の注意を呼ばむとするが如きは、畢竟投機的手段なるのみ。由來當今の日本畫界には

此の弊多し。而して同一なる病弊亦此の洋畫界に在り。吾人は斯道の爲に悲まざるを得ず。

第二に吾人の觀じたる所は、全般に通じて、寫生主義が、全く誤解せられたること是れなり。自然主義といひ、寫生主義といひ、或は寫實といひ、要は實らしく描けと敎ふるものなりと雖も、之れを誤解すれば、精神を失ひたる作品を生ずるに至らむ。小說の上に於いて、小杉天外子が、寫實を誤解したるが如く、洋畫界の諸氏は、寫生を誤解したり。氏等の所謂寫生とは何ぞや。皮相の研究に外ならず。裏面より言へば、現象の事實に束縛せられたるもの是れなり。假りに人體を取りて例とせむに、諸氏は、人體の解剖を忘却して、皮膚の如何に執着したる者なり。夫れ萬物には脉胳あり。これを主線といふも可ならむ。或は原型と言ふも可なり。而して變化は

如何に多樣なるも、未だこれを基本とせざるは莫し。此の脉胳の研究、即ち眞の寫生にあらずや。然るに諸氏は、皮相の變化を寫し、外形を模して、以て足れりとす。如何にして吾人は斯くの如く立言し得る乎。これ是れを記するに三箇の理由あればなり。

（一）多數の繪畫は、調和一致を缺けり。前記せる『水難救濟』の如き、『收獲』の如き、『通學』の如き、好く是れを示す。筆者は個々物の研究に、全心を奪はれて、毫も一致を看取するの餘裕を存せず。乃ち四方八方にて蒐集し得たる材料を、繼合して、以て一圖とす。故に其の畫を切離するも、尙ほ一部は繪として觀賞せらるゝことあらむ。元より畫家の妙技は、諸材料を集合するに在りと雖も、其の集合は、混合にあらずして融和なり。融和なき接合にして繪たるの價値を備へむとは、木竹を接合するよりも難事ならむ。既に接合に

於いて困難あり。多數の筆者は、集合の型に依らむとす。乃ち自己の獲たる材料に、或る種の型典的態度を與へて、多の一致を圖らむとするあり。更に言へば、芝居氣のある所、即ちこれなり。『箱根の山籠』『水難救濟』等の中には、此の弊の最も著しきを見る。それ嵌入的なるが故に、自然の態度を寫すこと能はず。若し皮相或は瞬時的現象の研究を主とせざらば、克く全面に自然の狀態を現すこと、さしたる困難にはあらざる可し。

(二)色彩の上に於いても亦調和なきを見る。或る二三を除きては皆な原色の瞭々たるは、蔽ふべからざる事實なり、念ふに、之れ亦個物の寫生を主としたる結果にあらざる乎。個々物に就いて見る色調が、其儘にて全部の畫布に現れたるもの甚だ多きは、個物の寫生に重きを置きて、毫も全體の色調或は根調を顧ざるの結果なり。吾

人は一の風景、或は風景の中に於ける人物を見る場合に、決して個々物として見たる色調を、再び個々物の上に看取せざるなり。然るに多數の筆者は、諸方より獲たる色調を、單に繼合して、以て全體の景を示さむとす。『木小屋の蔭』の如き、最も好く此の弊を示す。若しも筆者が、個々物の色のみの研究に束縛せらるゝことなくんば個々物を集合する上に於いて、深遠なる根調を現すことを得たるならむ。

(三)生氣なきもの甚だ多し。強いて言へば、ペンキ屋の作りしものと、相去ること遠からざる人物草木、出品中の大部分を占む。寫生を標榜する一派にして斯くの如く、活氣なく、血の氣なく、生命なき繪畫を出すが如きは、容易に雪きがたき一大恥辱にあらずや。勿論形に於いては整備せり。去れど生命は、外形の上にあるものに

非ず。然るに筆者諸氏は、只管外形の變相を忠實に模倣するが故に生命の存在する所を失ふ。畫面すべて靈氣なく、活氣なく、生命なく、意義なきも亦避くべからざる惡果ならむ。

泰西の寫生主義は、全く誤解を以つて、應用せられたり。場内到る所に於いて、寫生といふ繩は、筆者の手腕を縛し、筆者は、或る狹隘なる領域以外に逸出して、自由の筆を振ふこと能はず。桎梏の下に、自然の美妙を表現せむとす。亦至難の業にあらずや。爾も其の所謂寫生にして、眞實體を寫し得ざるもの甚だ多きに至つては、轉た將來を憂へざるを得ず。『木小屋の蔭』の鉋屑の如き、日本婦人の裸體の如き、寧ろ醜と言はざるを得ず。而して亦遠近法、明暗法、空氣的遠近法等に於いて、失敗せるもの甚だ多し。池の端を行く女學生と遠方の景との比較の如き、遠近法に於いて失敗せるものなり。『收獲』は、只人物に於いて、明暗法を用ひて、苅り入れたる稻に之れを用ふるを忘れ、迥かに蹴然たる山脈に、空氣的遠近法を應用するを忘れたるものなり。

第三に吾人の感じたる所は、布局に乏しきこと是れなり。惟ふに之れ亦寫生を濫用したる結果なるべし。瑣事を現さむが爲に、多くの事物を借りて、畫布を大ならしむるもの、即ち布局の注意を怠りたる者なり。故に意味薄くして、觀者に感興を與ふること尠し。吾人は小なる畫布の上に、深邃なる意義を現したる畫の多く出でむことを切望す。

第四に、此の場内に於いて、泰西の洋畫と、日本の洋畫との差別が、尤も明白に示現せられたるを見る。同一なる畫題を捕へたりと雖も、日本畫と洋畫とに於いて、深淺の差生ずる如く、同畫題を撰

みながら、東西の洋畫に於いて、雲泥の差を生ずるは、一たび此の會場内を覗くも明瞭に認め得べし。何ぞや。目下佛に在りて技術の錬磨しつゝある和田氏の繪畫と、彼の地より歸りて、日尚ほ淺き岡田氏の作とが、能く彼の畫法を會得したるを語つて、邦人の邪道に彷徨しつゝあるを、明かに指摘するを言ふ。吾人固より彼の地の繪畫或は畫法を知るものに非ずと雖も、二氏の畫が、多くのそれと異りて、爾も價値甚だ多きを看れば、氏等は眞正の畫法を學び得たりと謂ふも何の不可かあらむ。

岡田氏の『裸躰畫』と、日本婦人のそれを比較せよ。又同氏の森と他の森林の景とを比較せよ。又和田氏の『婦人讀書』と、『老婆の讀書』とを比較せよ。又同氏の『男子裸躰』と『水難救濟』中の男子裸躰とを比較せよ。繪畫としての趣味が、前なる諸作に於いて、津々たるは、予が輩の贅言を俟たずして明かならむ。次に其の色調を檢せよ。個々の色彩が、獨立することなく、いづれも根調を有して、爾も差別を現す所あるは、他の畫のよく及ぶ所にあらず。蓋し和田氏の『水車』、『夕照』、岡田氏の『裸躰畫』其他數點は、今回出品中の、逸品なるべし。

第五に邦人の顏色に、表現を與ふることの困難なるを感ずると共に、筆者に向つて、此の先天的困難に接する苦心に同情せざるを得ず。顏面に於ける表現こそ、畫の意義を深遠ならしむるものなりと雖も邦人の骨格、或は眼付は、此の點に於て甚だ平凡なり。即ち無意義の顏なり。胸底を示し得るだけの顏面筋肉なき顏なり。これを寫生躰とせる筆者の困難、げに意半ばに過ぐるものあらむ。『天平時代の婦人』の如き、平凡無味なる、寧ろ噴飯に堪えず。これ獨り筆者の

罪にあらずして、寫生躰の無意義なるが故なり。是〻に於いてか、如何にして表現を自由ならしむべき乎との問題生ず。筆者諸氏は、疑も無く此の大問題のために焦心すらむ。然れども予をして謂はしむれば、諸氏の所謂寫生を離れざる間は、到底充分なる表現法を考案すること能はざるべし。

最後に一言せむ、畫題を讀むことなくして、繪畫の意味を看取し得る程の作品の多からむを望む。即ち中心ある繪畫を希望す。場合に依りては、如何なる畫題を與ふるも、敢て不可なきか如き作品は吾人の採らざる所なり。而して無中心の繪畫多きは、前記せる諸種の病弊あるが故ならむ。洋畫の勢力、日々に日本畫界を蝕食しつゝある今日に當りて、大に反省する所あらずんば、觀者の多數は、再び理想を主とせる日本畫に向ふことあらむ。

吾人は同會の缺點にのみ就いて、忌憚なく論述したれども、陳列品中に價値あるもの一として無しとは言はず。否小品の中には、大に看るべき者あり。去れど全般より言ふ時は、缺點多くして、見るべきもの少し。根本的病弊は、全般に共通す。其病弊にして根治せられざらむか、偶然の結果としての佳作の外には、不滅の意義を抱持せる作品を看ること期し難からむ。（三十五年十月早稲田學報）

東洋歴史畫題に就きて

本年の美術界に於て、最も多く社會の注意を呼びたる者の一は、東洋歴史畫題の募集なる可し。蓋し畫題を募集して、其内の或者を選定し、是を某々の畫家に依頼して、表現せむとするの當否は、批

評家或は畫家の方面に於て、充分に論議すべき價値ある問題なるべけれど、予輩は此點に就きて、茲に縷々するを好まず。

東洋歴史畫題募集の呼び聲出でゝより、吾人は其結果を待ち詫びつゝ、斬新にして崇高なる畫題の提出せらるべきを想像しけるが、其結果の餘りに見すぼらしかりしは甚だ遺憾なりき。應募者の總數は僅かに四百を超ゆるのみにて、掲載せられたる畫題の大多數が、無趣味凡庸にして、事々しく歴史畫題として見るべき値打なき者のみなりしは、日頃東洋美術國と自稱する日本國民の名に對しても他き足らぬ心地す。素より四千餘萬の人口中に於ける『讀賣』の讀者の或小一部分が此擧に應じたる者なれば、其結果を以て、遽かに我が國民の美術的嗜好を是非するは、盲者が大象を判ずると、敢て撰ぶ所なかるべしと雖も、苟も新聞を讀み、文字を解し、繪畫に就きて

嗜好を有するのみならず、自ら進んで畫題を選定したるを視れば、其結果が一面の眞理を現すと云ふも、強かち不當なりと云ふべからざる可し。一斑を以て全部を推測せむとするは誤謬なり。去れど其の一斑が全局面の抱含する一部の眞理を代表すとせば、是が研究を等閑に附す可らざるなり。

劈頭第一募集に應じたる畫題を分類せしめよ。吾人は其理由の傾向に依つて是を分ち、而して其當を得たるか否やを研究せむ。等しく歴史畫題として投ぜられたる者なりと雖も、吾人は其中に四種の傾向あるを見る。即ち(一)宗教的(二)道德的(三)感情的及び(四)記錄的の四傾向是にして、余輩は此傾向ある者を呼んで、寧ろ非歴史畫題と謂はむと欲す。

(一)宗教的傾向ある者とは何ぞや。『眞如上人入竺の圖』『蓮磨廓

然』『釋迦が畢波羅樹下に於て無上正等覺を得るの圖』或は『獅子吼』或は『辯圓親鸞上人の徒弟となる』『出山の釋迦』等、其他凡て宗教上の意味を含めたる者を指して言ふ。此等數多の書題は如何なる意味に於て定められたるか。單に宗教的信仰を表現するが爲なるか。或は又然らずして、歴史上存在したりし宗教家或は信心家を主として選定せられたる者なるか。前者は既に其目的を誤りたる者なり。何となれば其表現する所は信仰に在りて、歴史は是を表す爲の一方便として用ゐられたる者なればなり。若しも歴史書として宗教的意味を現さむとせば、勢ひ後者の意味を以て適應の書題を撰ばざる可らず。然るに吾人の見る所を以てするに、此種の書題は多く前者の意味を以て定められたるが如し。よし後の主旨に依るとするも、多數は過去の人物或は事件を取るに、宗教的理想化を行うて樹立したる

觀念を標準とするが故に、畢竟すれば信仰を主とし、歴史を客としたる者と云ふべし。

（二）書題にして道德的意味を現す者あり。是等は道德的訓誡を示さむが爲に、歴史上の事實を借用せむとする者にして『重盛苦諫』『村上義光錦旗奪ふ』『謙信々玄に鹽を贈る』『豊太閤母の死に及ばざりしを悲む』等是に屬する者なり。此等書題は、皆教訓を主として人の龜鑑を造らむとするに在れば、其是を投書したる人々は、小學用修身書を引出して、畫家に依頼するに其挿畫を以てしたる如し。即ち忠孝仁義云々の道德的概念は、其等書題の主腦となりて、歴史上の事實は是を表す方便として取られたる者なり。去れば若しも其等の概念を彰表する事實だにあらば、其何たるを問はず、是を選擇するも不可なく、投書家は事々しく『此事實ならでは』と指示するの權利

なし。若しも此方面に於ける歴史書題を定めんと欲しなば、事實と思想とが、隔離すべからざる連絡ある者を指示せざる可らず。例へば『匪兕匪虎率彼曠野』の如きは此意味に於て充分成功したる者也。然るに多數の書題は、悉く概念を主要として、事實を忘却し、甚だしきに至つては支離滅裂、統一なく立場なく、殆んど繪畫として表現する能はざる者あり。前記せる豐太閤、謙信の如きは、皆繪畫を度外視して、無法の撰擇を試みたる一例と謂ふべし。幼稚も亦甚だしからずや。

(三)感情的と云ふ、寧ろ主觀的感情と謂ふも敢て不可なからん。これ感想を主として定められたる多くの書題は、皆主觀的なればなり。即ち自己の感情を表さむが爲に、過去の事實を借らむとせる者にして、事實其物は決して重をなさゞる者なり。例へば『わりなきわかれ』(高倉宮及信連の訣別)『鬼神の德』(西行法師伊勢の神祠に詣づ)『戀路のまよひ』(道長の戀)等は正しく此主旨によりて、決定せられたる者なり。去れば其等書題の表現する意味を芟除するも、事實其物は決して死滅せず消失せず。史的事實は假りの宿にして、選定者の目的は、撰擇せられたる事實以外に於て、而も充分に發現せらるべし。八百屋お七の戀も、靜御前の戀も、戀路を現すには充分なる材料なれば、投書家は或史的事實を指示するの必要無し。只戀や恨や怒や悲を現すべしと謂はゞ、畫家はお氣に召したる材料を取つて、此れを現すべし。假りに一歩を讓るとせんか。斯る書題は、一個人自身の感情を標準として、歴史を探り、而して是に愜ひたる者を選びたる迄なり。若し夫れ感情を主とせる者を定めむか。須臾からく是と事實と、生命上の關係ある者を選ばざる可らず、此の意味

に於て吾人は『後醍醐天皇の崩御』の最も穩當なるを附言す。

（四）記錄的と稱す、聊か文字明晰を缺く。予輩の斯く命名したるは此種の畫題を投書したる人々が、飽く迄も事實に執着して、文字に代ふるに繪畫を以て、歷史を傳へむとするが故に、其畫題を呼んで記錄的とは云へるなり。『安土宗論』『神國授受の圖』『マルコポロ忽必烈に謁見の圖』『一夫善く萬乘の君を救ふ』等の畫題は、皆此部類に屬する者にして、其此等を選定したる理由は、是は「當時の大事件也」「歷史中最も關係ある所なり」或は未知の事實なるが故に、是を顯すべしと謂ふに在り。約言すれば歷史教科書の挿繪を注文するに異ならず。元より大偉人或は一時代は、深遠なる意味を含むべしと雖も、此等は詩歌の材料にして、必ずしも繪畫の好題目なりと數ふ可らず。何となれば其事實の如何に廣く深く絶妙なる意義を含有す

るに拘らず、其あらはれに於ては、平凡無味なる者あればなり。去れば選定者は、內部生命を表現せる事實――縱令其事實が歷史の中心石たらざるにもせよ――を採用せざる可らざるに、大多數が此等の點に考慮する無く、只大事件大偉人を捕へ來りたるは、慨に客觀的にして、却て正鵠を失ひたる者と謂ふ可し。

第一者より第三者に至る者は、主觀的に選定せられたる者にして第四者は全く客觀に執着したる者なり。換言すれば豫め主義概念或は感情を、主觀の裡に決定して、而して後に歷史傳說を探りたるは、前三者の畫題投書家に甚だ多く、又歷史の事實に拘泥して、想を忘却したる者は、第四者の撰擇者中に、大部分を占むるが如し。

歷史畫は、過去の人物或は事件を、再生再現せしむるに在り。即ち觀者の想像に、過去の人物と事件とを、實の人間、實の事件とし

て浮出せしめざる可らず。此故に其人物或は事件が表す意義は、指定せられたる人物事件と、生起消滅を共にせざる可らず。然るに多くの書題を見るに、或思想感情の假りの宿家として、某の人物某の事件を捉へ來りたるにあらずんば、繪畫の面目を踏み付にして、貝殼をのみ陳列せむとするの偏癖あり。これ予輩が指して非歴史畫的傾向と呼び做す所なり。前者は貝を拾うて殼を捨て、後者は肉を忘れて殼をのみ愛しみたる者と謂つべきか。其孰れにしても、一方に偏したるは惜むべし。

歴史畫として稱すべき者は、其選擇せられたる事實の、珍らしきと誤謬なきと有りふれたるとに拘らず、事實其物が生命を備へて表現せられざる可らず。一個人の一生涯が、其境遇に對して、如何なる徑路を辿りたるか、一時代が如何なる内部生命を以て進みたるか

更に抽象的に謂はしむれば、生命と外界との關係は如何なりしかを表現せざる可らず。是に於てか初めて某の事實を指定して、其他の事實と是とを差別するを得べし。何となれば特種なる生命の關係は特種なる場合に限らるればなり。楠正成の生命が、其外界と特別なる關係を保つ所、即ち歴史畫本來の面目にして、亦正成其人を明治の今日に再生せしむる所以なり。即ち想と形とが、生命ある關係を有たざる可らず。若しも此意味を標準として、四百の畫題を通覽せんか。過半數は皆其立脚地を失ふべし。

吾人は固より畫題其物が、上記四種夫々の嗅味あるが故に、正鵠を失したりと主張する者にあらず。只其選定せられたる動機が、軌道以外に在るが故に、其結果が或は歴史畫以外に出でたる者あるを言へるにて、一方には其動機の如何に拘らず、半ば偶然の結果とし

て、好良なる歴史書題を提出したる者あるを承認す。

單に書題其物に就きて見るも、亦前記の四種あるを知るべし。去れど此場合に於ける第四者即ち記錄的なるは、寧ろ前三者夫々に配合せらると謂はむ方、却て然るべし。而して尤も多數を占むる者は道德的感想を主とせる者にして、宗教的信仰是に次ぎ、感情的は末位に在り。尙此點に就きて一言せしめよ。

宗教的書題には、如何なる意味の者最も多きや。其佛教的なるは言を俟たざれど、其佛教中如何なる宗旨に屬する者を以て、多數となす可きか。予が見たる所にては、禪味を帶びたる者は、多數を占むるが如し。按ずるに我國人の美的嗜好が、表象的なるを貴ぶに基因せるに非ざる歟。次に宗教的事蹟を希望したる者頗る多し。就中眞如上人の羅越國に於て虎害に遇たるが如きは、數人によりて選定

せられたり。遮莫吾人をして腹藏なく言はしむれば、今日に於て信仰書を望まむとするは、社會の趨勢上殆ど其效無るべし、看よや天下滔々、過去の宗教を離れて、信仰の火熱は、日に月に冷却しつゝあるに非ずや。

茲に道德的と云へるは、頗る廣義に用ゐたり。而して此等一群の中に現はれたる意味は、如何なる道德的概念に歸着する者多きやを檢するに、道に忠孝の二字なるは餘儀もなし。勇氣、智見、貞操等順序に是に次ぐ。

感情的と云ふ、寧ろ狹義に使用せり。兩性間の情、親子間の情、或は兄弟間の情等、是に屬する者にして、表現的同情と言ふも不可なからん。然るに吾人が此等の書題を見ると共に、大に不滿足を感じたるは、其情緒が餘りに女々しく纖弱なるに在り。個人は個人の爲に

泣き、個人を慕ひ、個人を憤れり。而して人類に對する涙あらず、一社會に對する愛あらず、一階級に對する怒あらず。

若しも此等四百の畫題が、悉く畫かれたりとせむか。爰に悅ぶべき現象あり。乃ち崇美を樂まむとする傾向是にして、神代の雄大なる物語が、其材料となれる一事なり。固より大多數を占むる者にあらねど、既に花咲き鳥謳ふ綠の野邊を過ぎて、千仞の谿谷を眼下に置き、神風に乘じて彼岸に達せむとする志の、鬱勃たるは、將來の美術界發達を卜するに足る可し。

繪畫は或瞬間を表す者なりと雖も、觀者其人に瞬間の感を惹起せしむる場合を畫く可らざるなり。觀者が其の繪畫に對するや、其想像は其繪畫に表されたる場合を中心として、其前後即ち過去未來に亘つて、人物を全體として觀ぜざる可らざるなり。換言すれば畫其

物は、畫中の事物の全部を代表する場合(瞬間)ならざる可らず。斯る畫にして、始めて永へに興味を失はざるなり。然るに多くの畫題は、此點に關係する所なくして、決定せられたるが如し。按ずるに主觀的に選定したる者と、偏客觀的に歷史を探りたるとの原因あらん如何に恐ろしく、樂しく、愛らしき瞬間なりと雖も、其が全部即ち一人物或は事件の中樞たらざれば、何等の價値も無かるべし。『毛利元就首實驗』『福島中佐宿を求む』『西行白峰に詣づ』等は皆此點に於いて失敗せる者なり。其他『後醍醐天皇の御崩』の如きも將に當を失ひたり。何となれば繪畫其物が吾人の想像の前進をして終止せしむ尙ほ『芭蕉終焉』の如きも、其瞬間に於て缺如たり。去れば吾人は此點より看て『柴田勝家辭世詠歌の圖』『花山院深夜宮を出て結ふ』『文天祥衣を燒く』等の畫題に贊す。

終に臨みて、時代を以て、全書題を區分せしめよ。源平盛衰記、平家物語を中心とせる者、太平記を中心とせる者、眞書太閤記を中心とせる者は最多く、其數各同列に在り。蓋し此時代は、其時代を中心とせる文學が、一般に普及せるが故ならん。然るに北條氏、德川氏の覇權を掌握したる時代より、選擇せられたる者は、古事記、日本紀、榮花物語、三鏡などを中心とせる者に比して、其數敢て多しと謂ふべからざるは奇なりと云ふべし。次に支那史に就きて是を見るに、史記列傳、漢楚軍談、三國史を、中心とせる者多く、降つては僅かに文天祥、鄭成功等あり。第三に印度を看るに、殆んど皆釋迦を中心とせり。蓋し印度史即ち釋迦を聯想せしむるの外に、亦我國人に知られたる者稀なるが故ならん。是を要するに、四百餘の書題中尤も少き者は近代なりとす。

故人の畫きたる以外に、歴史畫題を擇ばむは、寧ろ第二の要點なり。然るに應募者一般は、此一念に支配せられたる嫌あらざる乎。按ずるに非歴史畫的傾向も此一念より流れ出でし誤謬に外ならざるべし。予輩固より畫題の當否を一々に鑑評して選者の位地に代らむとする者に非ず。唯之を概括して、一般嗜好の向ふ所を研究したるのみ。豈他意あらんや。

（三十二年十二月讀賣新聞）

畫界漫筆

◎京都の後素協會員は、其の展覽會を、東京上野公園内に開設せり。これ非常なる覺悟に成れるもの。京都畫家の眞價は、此の一展覽會に因りて確定せらるべし。

◎一方に於いて、大塚文學博士は、東京美術學校内にて、『京都畫家對東京畫家』なる問題の下に、兩畫界の長短を論じて、將來の日本畫に及ぼせり。繪畫界は稍動けりと謂ふべし。

◎後素協會の進擊に遭ひ、大塚博士の論評を蒙れる東京畫界の、秋季に於ける活動、必ずや目覺ましきものあらむ。更に他方面を眺むれば、研精會員の奮起あり。『日本美術』の改良あり。これ皆、斯道の興隆を證する現象にあらずして何ぞや。

◎大塚博士は、兩都の畫家を對照して、東都は想を以て優り、京都は技術を以て勝ると論ぜり。固より博士の、指して東都畫家とせるは、日本美術院一派なりとす。若しも兩都の進歩的畫家を覓めて日本美術院と、後素協會とにすれば、博士の言は肯綮に當れりと謂ふべし。

◎線を十分に利用するを以て、日本畫の特術とすれば、京都は慥かに東京に優りたり。これ京都の畫家は、舊式の教育を受けたるが故なり。弟子入して、墨を磨り、繪具を解くことより始めて、多年の鍛錬を積むとせば、腕に十分の力量を備ふるに至るは、多言を用ひずして明なり。

◎これに反して東都の畫家は、新式の教育を受けたり。若しも新式にして、洵に組織的ならば、弟子或は生徒たるの年限は、大に縮少するを得べし。然れども日本畫教授の法は未だ全からず。今は只外國に倣うて、淺薄なる組織を定めたるのみ。その覺束なき教授法によりて教育せられたる畫家は如何に天賦の才能ありと雖も、本來以心傳心的なる日本畫法を會得するを得んや。東京の進的歩畫家は、斯かる教育を受けたり。美術學校在學即ち是れなり。技倆の拙劣な

る固より然り。

◎疑はゞ事實によりて是れを證せむか。有名ならざる後素協會員の筆と雖も、其の確固不動たる所謂東都大家を凌かむとする者ありまた廣業、觀山の諸氏は例外なれど、大觀、春草、武山、國觀、竹坡諸氏の筆が、元は京都にて技倆を研きたる玉堂子に及ばざること遠きは、凡ての批評家の承認する所なり。更に棲鳳、松年、景年の諸氏の筆に至つては、東都畫家の及ぶ所に非ず。

◎さはれ舊式の敎育を受けたる京都畫家は、凝結せり。其の思想は、舊套を脫せざるなり。これに反して東京の畫家は、新空氣を吸ひ批評家の理論に採まれたるが故に、思想は大に進步せり。

◎去れど吾人は是れと共に、東都畫家の思想は未だ不動の根據を有せざる者なりと謂はむ。東京の畫家は、獨逸わたりの、甚だ高遠

なる美學論を受納するに足るべき用意なくして、其れ等を嚙れりと謂ふが、余りに失禮なる語ならば、諸氏は感ぜざる事柄を表現せむとすと謂はむ。

◎言はでも、感ずると、知るとは異れり。東都の畫家は、實際に感銘せざる事を、絹素に表現せむとす。只管舊思想、或は舊畫題を脫せむとして、新奇を衒はむとするが如きは、眞の畫家としては、最も忌む所なり。氏等は科學者の態度を以て、畫家たらむとす。感情の隆起なく、信念なくして大作出づとせば、誰人と雖も畫家たるを得べし。見よ、美術院の繪畫は、少しく筆使ひの心得ある者の模倣し得るものならずや。

◎所謂朦朧躰、これ何ぞや、感想高大にして、表現しがたきが故に朦朧となり、表象的となれるものか、或は感想の大を示し、一方に

は胸裡の無一物を隱蔽せむが爲に、殊更に、斯くの如きを作れるか。是れ疑問なり。

◎感想の自由なる發現のために、在來の線を厭はむとするは、日本美術院派なり。圓滿なる表現のために、線を障碍物なりと見做し色彩の陰影に依つて、微細の變動を示さむとするは、大に賞すべき所ならむ。而してこれ又一種の朦朧躰を生起せし原因ならむか。

◎去れど斯くの如くせば、遂に洋畫と日本畫との差別は、全く消滅するに至らむ。線を棄てゝも日本畫には生命ありとは、立言すること能はず。

◎日本畫の線の特色とは何ぞや。線なる者は、日本畫に於いて、如何なる發達をなしゝぞや。單に境界を示すためにのみ、これが使用せられたりとせば、そは觀者の興を減ずる傾あるが故に、是れを

亡ぼして可なり。然れども我が線は、境界線以上に及びたるものに非ざるか。

◎我が線は、有意的に發達せり。これ西洋に看ざる所なり。一線を劃して能く暴風を示し、筋肉を示し、さては剛柔强弱善惡正邪の意味を發現し得るは、日本畫に見るべき特色に非ずや。

◎斯くの如き特色ある線を放擲して、日本畫の生命を保たむとするは、漆黑の毛を有たざる婦を見て、日本美人なりと喜ぶに異らず。

◎吾人は觀山子に於いて線の利用を看る。氏は線を活用すると共に、洋法を採用す。其の法、未だ全からざる者ありと雖も、將來の畫家の進むべき道は、彼處なるべしと思惟せらる。

◎更に吾人が怪とする處は、新進家の、毫末も形式を問はざる所

なり、一方に於いては、遠近法とか、或は陰影とか、或は線を殿するとか、大に洋法を學びながら、物躰の形を正しく現すを勉めざるは、何事ぞ。寫實を學ばずして、新領域を作らむとす。寧ろ徒勞に屬すべし。

◎京都畫家は、單に扮本を再現するに巧なるのみ。その缺乏する所は思想なり。今にして其の涵養に勉むる所あらむか。將來の進歩見るべきものあらむ。東京畫家は生意氣なり。十七八才の青年が、親父の言ふ所を學ぶが如し。固より思想は其の胸裡にあり。今にして技術を磨き、靜肅なる心狀態をとらずんば、遂に進歩するの機會なからむ。

（三十五年七月太平洋）

黄禍論とは何ぞや

黄禍論たる、今日發生したるものに非ずと雖も、世界が是れに注意し、吾が國民の亦之れを聞くこと頻なるは、戰端開かれたる以後なりとす。北清事件の起るや、獨逸皇帝は、東方征伐の寓意畫を物せり。遠く東方には雲暗憺として、龍に座せる佛像あり、其の下には魔軍の如きものあり。而して歐洲諸國を代表する騎士等、耶蘇教の天使に導かれて東方に遠征を企てむとするもの、これなり。

此の繪畫の公にせらるゝや、黄禍論を表象すと評するもの甚だ稀にして、多くは清國團匪の征討を意味すとせり。實際日本人も亦、かく眺めたるなり。然れども皇帝の眞意は、黄色人種排擠を基礎とせるものなりき。拳匪は黄色人種と同一視せられたり。佛教は白人

の仇敵と見做されたるなり。黄人の禍を除く可しと思惟して、新時代の十字軍を起すべきを說きたるなり。

獨逸皇帝の黄禍論は、婉曲に發表せられたりと雖も、かの有名なる英國の週刊雜誌『スペクテートル』誌の如きは、頗る露骨に之れを論じて、將來を警戒すること久しかりき。此の他佛露の論客にして東方の將來を恐れたるも、決して尠しとせざるなり。然れども歐人にして、此れ等の說に耳を傾けたるは、甚だ少數にして、多數は、東洋何事をか爲し得べきと思惟し、黄禍論の如きは、畢竟杞憂に外ならずとて、之れを一笑に附し去りぬ。吾れ等をして言はしむれば黄禍論者も東洋の眞相を知らざるものなり。其の反對論者も亦之れを解せざる者なり。

日本軍の連戰連勝は、黄禍論者に、幾多の論據を與ふると共に、

歐洲の社會全般に、黄人の勢力、懼るべきものあるを知らしめたりされば戰後の歐洲諸雜誌にして、黄禍論のために、貴重なる紙面を割かざるは莫く、或は是れ事實たらむと論じ、或は之れを無根の恐怖なりと論じて、三百八十餘萬方哩の歐洲は囂々たり。軀幹大なる白人が、小粒の日本人の活動を見て、かくも議論を沸騰せしめたりとは、これ滑稽畫家の好題目にあらずや。

歷史的に觀察し來れば、歐人が東洋の勃興を恐るゝは、强ち根據なきにあらざるべし。中世紀に於ける蒙古族の跋扈は、一大打擊を歐洲の東部に加へたるなり。拔都、帖木兒の名の露國に於ける、蓋し加藤清正の雷名の、朝鮮に於けるが如くなりしならむ。げに成吉思汗の覇業を、朝夕に回顧しつゝありし蒙古の民は、干戈を動すごとに、スラヴの心膽を寒からしめたるなり。

然るに蒙古の勢力、いつしか衰退して、露人はイヴアン三世の力によりて獨立し、尋いで四隣の蒙古族を擊退し、進んで西比利亞を略するや、露人は蒙古族の進入を防遏する國民と見做され、降つて彼れの黑龍江岸を横奪し、支那に向つて、無道の腕力を用ふるや、歐人皆な露西亞を以て、東方黄色人種に對する金城鐵壁となしぬ。即ち西洋の文明を代表して、東洋の勢力を擊退すべき地位に在りしものは、露西亞帝國にして、かの烏拉爾の山脈が、歐亞兩大洲の境界たるが如く、露國は東西文明の境界たりと思惟せられたるなり。加之、其の領土の廣き、兵備の大なる、歐洲の天地を壓倒し、意屈地なき諸國は、其の一擧一動を懼れて、恒に鼻息を窺ひつゝありしなり。

此の露西亞帝國や、日本軍の攻擊に遭うて、拔都大王以來の苦痛を感ぜり。否、拔都王の攻擊よりも、更に深大なる攻擊を蒙りたるなり。由來歐人は、日本を以つて、小國弱國なりとし、露國を以つて、大國强國となしぬ。其の强大の國は、今や小國のために苦めらる。判定力に乏しきものゝ、直ちに黄人禍を唱ふる、亦怪むに足らざるなり。

吾人は言はむ、白人にして黄禍を唱ふれば、其の論調に正比例して歐洲の大患起らむ。之れに反して、黄禍を唱へざれば、亦之れと正比例して黄禍少からむ。即ち白人の量見一つによりて、黄禍は事實ともなり。空論ともなるなり。

それ歐羅巴人には、祖先傳來の自負心あり。一言すれば、世界中最も優等なる人種は、アリア人なりとの思想は、遠き古より遺傳せられたるなり。其の起源に關しては、吾人之れを詳にせずと雖も、

恐らくは基督教に謂ふ所の『選ばれたる民』の思想は、一轉してアリア人種は、最大優等の民族なりとの自負心を發生せしめたるものならむか。そは兎も角も、歐洲人が、世界の各人種中、最高の能力を有する者は、自身等なりと信じ、其の文明こそ、世界を支配すべきものなれと信ずると共に、耶蘇教を以つて、世界の宗教と思惟するは、蔽ふべからざる事實なりとす。

世界の歴史を回顧すれば、彼れ白人が、斯くの如く思惟するに至りしは、決して根據なきにあらざるなり。埃及亡び、波斯滅び、強大なりしサラセン亦、耶蘇教徒の力によりて西班牙より擊退せられて、遂に衰退せり。蒙古族の如きも、一たびは猛烈なる勢力を以て歐洲に侵入したりと雖も、遂には歐洲人のために破れたり。これ上代又は中古の歴史にして、是れを近世に就きて見るも、最後の勝利は、常に白人の占むる所となり、其の文明は、ます〳〵世界に普及せられつゝあるなり。即ち白人に接觸したる人種は、其の何たるを問はず、咸く衰退し、遂には滅亡して、彼れの頤使する所となりしなり。斯くの如き歴史を有する白人が、世界最強の人種は、アリア派なりと自信するは、蓋し當然にて、敢て怪むに足らざるなり。

されど吾人は一歩を進めて考察せざるべからず。從來歐人即ち白人が、勝利を占めつゝありしは、果して如何なる理由ありしにや。其の文明が眞實優等なりしによるか、或は又他の文明を利用したために因るか。吾人は其の原因を後者に於いて求めむとす。

歐洲の文明は優等なり。然れども之れとても決して完全なるものに非ざるは明かなり。又其の文明が、純粹に白人の産物たらざるも亦明かなり。之れを其の發達史につきて見よ。印度、埃及、さては

亞刺比亞の文化が、如何に多くの教訓を白人に授けたるかは、吾人の言を俟たずして瞭然たり。その基督教の如きは、彼れ白人の、尤も尊重する所、而して其の感化によりて、歐洲の文明は、長足の進歩を示したるものなりと雖も、其の起源を尋ねれば、これイエスなる聖賢が、東西の宗教を融和したるに本づくものならずや。

歐洲の人種が、其の勢力を、世界に及ぼし得たる所以は、各種文明を融和したるが故に外ならず。いかなる文明か亦長所を有せざる其の長所は、希臘羅馬の時代より、今代に至るまで、常に歐洲人の手によりて混和せられつゝありき。而して白人は、其の混合的文明を以つて他人種に臨めり。劣者の敗北したる、これ當然の結果なりとす。然るに今日の白人は、其の勝利は、全く歐洲人、特有の文明に基くとなし、有識の士と雖も、之れを信じて疑はざるなり。即ち

融和せられたる文明が、四隣の人種を征服し得たるを忘却して、自己本來の勢力を偉大なりと誤認したるものにして、之れを譬ふれば父兄を笠に着たる小學校生徒の、同窓間に自己の力を誇るに異らざるなり。

是に於いてか、吾人は疑ふ。自己の勢力偉大なるを誇る歐人は、何か故に黄色人種を恐るゝか。其の文明にして、最強最大ならば、何ぞ之れに依頼して平安を求めざる。彼れ等は自身を最強なりと信じ、他人種を劣等なりとするに非ずや。強者にして弱者を恐る。トンチンカン是れより大なるは莫かるべし。蓋し彼れ等は、中世紀の昔を回顧して、今後日本及び支那の同盟が、再び歐洲に禍を及ぼし數百年來の經營になれる歐洲を、破壞せむことを懼るればならむ。

歐人は我が日本を指して、黄人中、尤も危險なる人種となす。去

れど是れ誤解なり。日本人は歐洲を蹂躙せむと欲するものに非ず。否、我れ等は東西兩洋の文明を混和融合して、全世界の平和を保全せむと欲する者なり。今日干戈を取りて、滿洲の野に、露兵と戰ふもこれ世界の平和を維持せむと欲するが故に外ならず。夫れ文明とは、人類の自然性の發達に外ならず。されば一の文明に、國民的、又は人種的特色あるあれば、其の文明は、未だ大ならずと謂ふべきなり。これを個人に就きて看るも亦明かなり。一個人にして、其の思想上鄕土的色調ある度合に於いて、其の人格の高下分かる。釋尊の如き、孔子の如き、老子の如き、基督の如き、世界的性質ある者の、よく永遠の生命を保つを見ても、之れを推知すべし。文明に於けるも亦斯くの如し。

我が日本は、文明の統一を以つて、國民活動の目的とす。領土を

擴張し、暴力を振はむと欲するが如きは、吾れ等の好まざる所なり。之れに反して露國は如何。野蠻なる時代の領土擴張主義は、今日に於いてすらも其の國是なり。これ世界の平和のために許すべからざる點なり。

吾が國、維新以後の歷史は、東西文明の調和を一の理想として進み來りつゝあるは、如何に頑迷なる歐人と雖も、之れを認めざるべからず。政治上、實業上は言はずもあれ、文學、美術の方面に於いても、東西洋の折衷を計りつゝあるは、日々の事實に照して明かなり。斯くの如き國民を、如何なれば危險なりと稱し得べき。蓋し西洋人の黃禍を唱ふるは、世界の支配權を東洋人の掌中に握られむことを惶るればならむ。彼れ等の歷史は、異邦人種壓倒を以つて充てり。故に彼れ等は、窃かに其の逆襲を惧れつゝあるなり。嗚呼彼れ

等の胸底、いかに狹隘なるかよ。

西洋人にして黃禍論を唱へむか。吾れ等は之れに對して、白禍論を唱へむ。白人は他人種と其の文明との撲滅を目的とすればこそ、今日黃人の勃興を恐れつゝあるなれ。其の恐怖の結果、黃人に對する白人の同盟は結ばれむ。これ吾れ等の存在に關して、由々しき大事なるが故に、黃人亦同盟を堅く結んで、彼れ等の野心に對抗せざるべからず。此の故に吾人は言ふ、歐人にして黃禍を唱ふれば唱ふる程、これ他日必ず事實たるべしと。

終りに一言せむ。實際の黃禍なるものは、其の基礎根柢を東洋に有せずして、歐羅巴內なる露國其の中に有す。露はスラヴ主義を以つて、世界を支配せむとする者なり。ペーテル大帝は、西方文明を摸倣すると共に、其端緒を開き、カザリン女帝に至つて、歐洲をス

ラヴ化せむとする大望顯出し、今日に至りて其の主義更に擴張せられ、全世界を化してスラヴ的たらしめんとす。スラヴ主義とは何ぞや。そは其の反動として、トルストイ、ドストエフスキー、虛無黨等の潮流を呼び起したる程野蠻なるものなり。これを國是とする國家は、眞に黃禍の原因なりと謂ふべきにあらずや。

（三十七年七月太陽）

學習院大學の廢止

學習院の大學部は、六月十八日限りを以つて廢止せられ、學生は京都帝國大學に移さるゝことに決定せり。吾人は敎育界のため、はた華族社會の爲に之れを祝す。

華族社會の爲に、特別の學校を必要とする場合、決して尠しとせざるなり。然れども其の學校たる、專門の技術又は學料を敎ふる所にあらずして、倫理的敎育、即ち品性の涵養を目的とするものならざるべからず。小中學校の如き是れ也。若しも理想的に言へば、華族と平民との間に、何等道德の差異なかるべしと雖も、而も實際上にては、華族としての道德は、平民としての道德と、相異る所なかるべからず。これ主として道德實踐の上に生ずる差別なり。されば華族には華族らしさ道德を敎ふるの必要ありて、其れが爲には、特殊の學校を開かざるべからず。華族平民の子弟、混同して一堂の下に在るは、理想上より見れば、美しき敎育なるべしと雖も、實際上否尠くとも今日の我が社會狀態にては、むしろ敎育進步を阻害するものと謂ふべし。何となれば吾が社會には尙ほ階級を以つて、人を

評定せむとする舊惡想ありて、個人の眞價は、未だ充分に承認せられざるなり。乃ち華族の子弟は、常に華族として取扱はれ、平民と異る所ありと見認められ、幼者、靑年は、平等なりとの思想は、未だ充分に普及せられず、否、幼者靑年等自身も亦、斯くの如き思想を解し得ざるなり。されば今日、遽かに華士族平民の子弟を、一堂の下に集むるは、善果を生ずること甚だ稀にして、却つて弊毒を釀すことあるは、識者を俟たずして明かなり。

品性の敎育は、小中學校時代に於いて施さるべきものたるは、吾人の言を俟たざる所なり。されば此の時期に相當する華族の子弟の爲に、特殊の學校を開きて、華族の道德を涵養するは、社會一般の進步に効多しとすべし。然れども學術を敎授する場合は、全く之れと異れり。何となれば、學術技藝は世界的にして、華族の學術、平

民の學術と稱すべきものは、吾人の未だ聞かざる所なればなり。即ち人間の等級に依りて學術の上に、種類の別を生ずるに非ざる也。されば其の教授の爲には、殊に人間の階級に應じたる學校を建設するの要なきは、殆ど自明なりと謂ふべし。小中學校たりと雖も、其の大目的が、知識の增進に在りとすせば、學習院及び華族女學校の如きは、今日直に廢止して、冗費を節減するこそ國家社會の利益なれ。

專門學校又は大學校は、學術の蘊奥を究むる堂なり。而して吾が國には東京及び京都に大學ありて、更に近き將來に於いて、二三の大學建設せられむとす。斯くの如き時世に在りて、特に學習院内に大學部を設くるの必要、いづくにかある。元來華族なるものは、競爭心に乏しきものなり。これ其の生活の豐かなるが故に外ならず。

斯くの如き一社會をして、他の一社會と接觸せしむるは、これ前者の惰眠を覺醒するに、最も適當なる方法と言ふべきなり。

華族ほど、學術の蘊奥を究むるに、適當なる地位に在るものあらざるなり。平民は、いかに能力に富み、志望ありと雖も、富貴ならざる以上は、世計の爲に、幾多の時間を費すが故に、學藝の蘊奥を研究すること極めて困難なりと雖も、世襲財産を有する華族は、志望のまゝに研究を積み得べし。げに大學に入りて、深淵なる學問を研究すべきは華族にして、其の奮勵は、社會の進歩に、貢献する所甚だ多しとす。英獨諸國に、爵位ある學者の多きは、予の言を證するものなり。

華族社會に對して、特に高等の學校を設立する必要ある場合は、僅に二あるのみ。一は國内に完全なる學校なき場合なり、一は國内

に數人種ある場合これなり。翻て吾が國内を看るに、兩都の帝國大學は、最高の教育府として、何等の遜色もなきにあらずや。而して邦内は、總て一人種にして、同一の言語を用ふ。斯くの如き我が國に於いて、特別なる華族大學校、而も建設以來、何等の貢献をも爲さゞりし無用の長物を廢するは、洵に當を得たりと謂ふべきなり。

（三十七年七月太陽）

文明史上の日露戰爭

第二十世紀の問題は、東洋に集れり。

歐米の人は常に誇稱す。文明は遂に野蠻を征服すと。而して彼れ等の東洋に向ふや、猶ほ亞非利加内地に向ひしが如く、文明の光明

を以つて、野蠻の氷塊を溶かさむと言へり。或る場合に於いては、事實斯くの如くなりしならむ。例へば彼の北清事變の如きは、全く歐洲の文明と、支那の野蠻との對峙なりしなり。去れど或る他の場合にありては、文明の名の下に、虎狼の暴力を振はむとするものあり。其の例としては、滿洲に對する露國の態度これなり。

吾が帝國、今や露の暴逆を壓倒せむとす。これ東洋の文明國が、西洋文明中に殘滯する野蠻の分子を殲滅せむとするものに外ならず文明を誇る歐洲には、スラヴと稱する狂暴の民族あり。此の種族や同じ流の種族たるチュートン、ラテン等の仰制し得ざりしもの、而もナポレオンに勝ちたるを以つて、歐洲を睥睨せむとす。英國を除くの外は、佛、獨の強國を以つてするも、尚ほ其の鼻息を窺ふ。然るに今や東洋の文明國は、文化の利劍を振つて、北歐洲の山男を討

伐せむとす。而して其の第一歩に於いて、既に彼れの荒膽を潰せり頑迷なる歐人は、文野の位地、顚倒したりと思惟すべし。嘻、これ何等の快事ぞや。

露西亞とは如何なる國家ぞ。壓制と暴力とを以つて、國勢の繁榮を謀りつゝある野蠻國なり。試に其の内政を見よ。宗敎の自由を許さず、出版の自由を與へず、野蠻なる强者の權利を以つて國民を苦めつゝあるに非らずや。彼れ等は基督敎徒なりと自稱しながら、耶蘇の言を傳ふるトルストイに迫害を加へたるに非ずや。キリストを出しゝ猶太族を、キシニエフに於いて虐殺したるに非ずや。其の文學が、露國の專制的政治とは正反對の地位にありて、常に反政府的の臭味を有するを觀じても、或は亦虛無黨なる者の往來するを看ても、國家が如何に非文明的手段を以つて、國民を虐げつゝあるかを

推知すべきなり。次に其の外部に向つて執る所の方策を見るに、徒に有形上の膨脹を欲して、精神上の勝利を顧ず。これが爲には、譎瞞詐僞、あらゆる不義惡慝を行ふも、恬として恥ぢざるなり。これ太古、腕力を以つて勝負を爭ひし野蠻時代よりも更に亦劣等の野蠻なるものなり。それ蠻人や愛すべし。然れども僅に文明の皮相を學びたる蠻人が、僅小の知識を運用して、自己の利を貪るに至つては尤も憎むべし。

露國は文明の皮を冠れる蠻族なり。羊の皮を冠れる狼也。かの義和團徒の如きは、無智は無智なりと雖も、決して惡むべき者にあらず。露國に至りては、正邪善惡を判別するの力を有しながら、尙自利のために暴力を逞うす。彼れ等の血脈に流るゝものは野蠻素にして、歐洲の文明諸國に對すれば、其の爪牙を隱し、他の諸國に對す

れば、是れを現して貪婪飽くことを知らざるなり。露國をして歐洲化せしめむと譬ひたるペーテル大帝も、其の根底に於ては、巨魁たるの野獸性を有し、歐洲を露國化せむと望みたるエカテリナ女帝は表裏共に野蠻なり、獰惡なり。此の兩帝の意志や、今に傳りて、益す强烈なり。されど歐洲の强國は、北方野蠻力の南下を拒み、遏の暴力も、出づるに由なく、遂に方向を換へて、東方に於いて遠慮なく利を收めむとす。清韓や其の籠絡する所となるべし。然れども吾が日本帝國は、文明の赫々たる光明を以つて其の妖雲を拂ふべし。

ヘラクーズの遠征は、文對野の戰爭なり。サラミスの海戰亦然りプラテヤの大戰亦然り。希臘人は、文明の表象たるヘラスの理想を掲げて、東方波斯の蠻力を擊退せり。波斯の大軍が、ヘラスの一拉に遭うて大敗せるは、啻に希臘人が强力なりしのみならず。そは文

明の光を以つて、頑迷の蠻族を退けたるなり。シャーレマンの天下を統一せる亦文明の力なり。ナポレオンの英國海軍に敗られたる、これ其の野蠻なる血素を以つて戰ひしが故のみ。

今や吾れ等は東洋文明の光を以つて、西洋文明中の野蠻的分子を討たんとす。勝敗の數、固より明かなり。彼れ露國は幾百萬の大軍を編成すと雖も、これ正義に逆ふものなり、眞理に敵せむとするものなり、文明に反抗せむとする者なり、吾が日章旗は、文明の表象なり。正義と眞理との符表なり。其の向ふ所何處にか亦敵とすべきものある。

東西の世界が、文と野とを代表して、一大決戰を開きたるは、波斯戰爭を嚆矢とす。而して日露の大戰爭に於いて、其の第二回は試みらる。先には西洋が文明を代表し、今は吾が日本之れを代表す。

皇祖は、日に向ふは不利なりと敎へ給へり。而して金鵄は尊き弓上に留つて、金色の光を放ちぬ。日は何ぞ。これ文明なり。文明に逆ふは非なり。文明を擔うて戰へば利あり。金鵄何ぞ、これ文明の表象なり。此の眞理や、不知不識の間に傳はりければこそ、蒙古の大軍も、一陣の風に亡びぬれ。

文明對野蠻の戰爭の結果は如何。無道暴橫なる一種族の敗亡と共に、文明史上に一大變化を生ずべし。基督敎國の外に文明もなく、威力もなしと思惟せし歐米人は、今の戰爭に依りて、始て自身等の以外にも、文明を代表する一大勢力の存在するを、事實の上にて看取すべし。吾れの文明は必ずしも西洋文明の模倣に非ず。殊に戰鬪に於ける我が文明的態度は、決して歐米よりの輸入にあらざるなり。

されど我れ等は覺悟する所なからざる可らず。夫れアーリアンに接せし民族は、一として滅びざるは莫し。成吉思汗、拔都、帖木兒の覇業と雖も、遂にはアーリアンの勢力に勝たず。サラセンの文化亦アーリアンの爲に勢力を奪はれたり。此の他彼れに接せし蠻民の服從は言はずもがな。而して今や支那朝鮮は、漸く彼れ等の左右する所とならむとす。獨り我が國は、彼れの爲に侮を受けずして今日に至りぬ。然れども今や露の勢力を防遏して、淸韓の地を危機に救ひ東洋に於ける人種の一大同盟を造らば、是れより後の世界史は、激烈なる人種競爭と變ずべし。此の同盟や、人道の上より、文明の上より、必ず組織せられざるべからず。其の曉に至つては、其の代表者たるべき我が帝國臣民の責任や、甚だ重大なり。徒に勝利の報を俟つこと勿れ。露は大敗するも、人種競爭としては、大敵眼前に在

り。願くはヘラスの威權、地中海上並に其の沿岸を風靡したるが如く、吾が文明の旗幟、永遠に世界の平和を守らむことを。

（三十七年三月太陽）

學者の責任

◎學者の任務は、眞理の研究に在ることは、今更言ふ迄もないが之と共に世間一般に利益を與へるといふ責任も有ることは、爰に喋々論ずる必要もなく明瞭である。

◎殊に我が國現時の情態では、學者として世に立つ人は、尤も熱心に、世人を敎ふる必要があると思ふ。

◎外國にした所で、無智無識の鈍物も有らうが一般と言ふ上に就

いて、我邦の知識程度と比較を取つて看たならば、餘程我國の方が劣つて居るであらうと思はれる。

◎試に頗る通俗なる外國書、例へば小說にしろ或はお伽噺にしろ或は其他の硬派の書籍にしろ之を取つて一讀したならば、案外高尙なとが書いてあるのに驚かざるを得ない。

◎論理學とか、倫理學とか、或は醫術上、或は法律上の名辭などが、遠慮なしに使つてあるが、若しも此種の文字を、我が通俗的書籍の內に加味したならば、其書籍は決して賣れ行くまいと思はれる。

◎人體構造の例を取つて見ても、吾國人が、此知識を缺いて居ることは、實に甚しい。社會の中流上流に居る人でさへも、小兒の脉搏と老人の脉搏とには、如何なる差異があるかを知らぬ者が多い。

まして下層社會に於いてをや。これらが藪醫者でも喰ひはぐれの無い原因である。

◎斯の如き狀態は、教育の進歩が遲いといふ大原因に基くのであるが、一面に於いては、學者たる者が、社會教育に熱心でないといふことも滅却すべからざる原因である。

◎何も高尚な理論を吐けよと云ふのでは無い。また獨創の見地を示せといふのでも無い。今日の科學的研究結果の一端を平易に說明して欲しいと言ふのが、我輩の希望する所である。

◎然るに今日の學者間の通弊として、社會教育を無視して居る。而も先生等の意見では、平易の說明は、自分等の手を煩はす必要がない、世間には、隨分其方面に適當して居る人が多いとて、ィヤに濟し込む人がある。

◎隨分亂暴な、不親切な言ひ樣ではあるまいか。我輩の考ふる所では、平易な說明、即ち通俗的解說は、其學問の蘊奧を研究した人でなくては、完全に出來ぬ者である。半嚙りの先生が試みる通俗的解釋は、却て人に疑團を懷かしむる基となる。

◎釋迦が說敎してこそ、涅槃といふ觀念は女にも解り、基督が述べてこそ、神といふ觀念が、小供に迄も平易に解されたのである。又日本の道話の如きも、立派な學者が平易に孔孟の敎を祖述したればこそ、愚夫愚婦も、仁義の道を知つたのである。近く例を取れば故福澤翁の如き、自分の胸裡に立派に落ち付いて居る思想を、下女下男にも分るやうに說かれたればこそ、其一言一句が、大方の讀者に利益を與へたのである。吾等自身の經驗から見ても、實驗した事は、如何程にも平易に解釋し談話する事が出來るが、書物でのみ見

た事、或は聞いた事は、或度以下には、平易明晰に說明する事が出來ぬ。

◎吾輩は、當今の碩學が、學問研究の餘暇を利用して、社會敎育に力を注いで戴きたい。法律の如き、醫學の如き、工學の如き、其他種々の學問を平易に說明して貰うたならば、世間一般の知識を進歩せしむると共に、現世間に跋扈して居る迷信を打破る事が出來るであらうと思ふ。

◎次にもう一つ學者に向つて願いたい事は、飜譯である。今の學者間には、飜譯を恥辱と思ふ弊があるが、是れは甚しい誤解ではあるまいか。

◎世間には、便宜なき位地に居つて、而も學問の極所に達しやうといふ志願を懷いて居る人がある。此の人々は有らゆる手段を盡して、新らしい研究結果を撿べ、且つは泰西の學界をも眺めやうと思ふのであるが、種々の障碍の爲に、其目的を達することが出來ぬ。

◎此人々の爲に學者たる人は、泰西の文物を紹介する責任があると思ふ。單に新らしい研究を敎ふるといふ點から見たならば、泰西の勞力を俟たず、現今の學者其人の研究を發表すれば以て足れりといふ人もあらう。

◎然しながら是亦見當違の話である。何故なれば、日本の學界は總ての方面に於いて、學問の研究の設備が完全して居らぬから、所詮は外國の研究と歩調を一致する事が出來ぬ。醫學の如き我が學界では、尤も進歩した學問であるが、其學術すら、獨佛伊とは併行し難い。

◎一言以てすれば、我國は、まだ反譯の時代に在るのである。泰

西名流の學説を、出來得る限り紹介すべき時代である。之と共に外國最近の思潮を報道すべきは、いつの世に至つても、忘るべからざる要務である。

◎そこで此任を盡すために、尤も便宜ある位地に在るは、論ずる迄もなく學者である。少しの餘暇を以て、筆を執つたならば、世間幾許の人を利益するであらうか。殆ど數へ盡せまい。然るに或る學者などは、抄譯、反案、甚しきは反譯をして置きながら、自作自著の如き樣子を見せる。其心情は物質上の詐僞師と同一である。

◎或學者は、此等の目的を達する爲め舞臺が無いやうに言ふ。洵に世間見ずの囈語である。吾が國では出版事業は隨分進歩して居つて、若しも篤志の學者あらば喜んで是を歡迎する。

◎新聞雜誌に筆を執るを恥辱と思ふやうな學者ならば、始から相談が出來ぬが、苟くも國民に對する義務を意識して居る人ならば、吾輩の希望は決して不當でない事を承認すべき筈である。

（三十四年八月太平洋）

人生問題の研究と自殺

曩に一青年の『巖頭の感』なるものを貽し、華嚴瀑に身を投じて死するや、大多數の人は稱讃の辭を以つて亡靈を弔ふと共に、斯くの如き有望の青年を悶死せしめたるは、社會の罪なりとて、痛く現時の物質的文明を攻擊せり。殊に或る人の如きは、彼れを指して大なる人格なりと迄稱揚せり。それ自殺者の數、決して尠からず。毎朝の新紙は、必ず一二件の自殺者を報道せざるは莫し、然るに世人

は此れ等に對しては、何等の注意を向くることなく、獨り今回の事件に對して讃辭を列ぬ。而して其の理由とする所は、彼れが人生問題の爲に死したりと言ふに在り。是に於てか予輩は問はむと欲す、何が故に人生問題の爲に自殺するは尊く、何が故に負債のため、或は失戀のため、或は試驗落第のため、其の他種々の原因のために自殺せる者は、識者の一瞥を價せざるか。それ自殺者を論評せむとすれば、先づ其の人に就きて多方面の研究を盡さゞる可らず。縱令自殺者の遺言は如何なるにもせよ、人の虛榮心多きを知らば、其の動機を精密に究むるにあらざれば、其の行爲の是非は決し難し。去は れ是は特殊の問題に屬するのみならず、吾人は其祕密の方面を究むるを好まず。依つて吾人が問題は、今の自殺者一人に限られたるに非ずして、普く人生問題の爲に自殺するは、果して稱讃すべき價値

ありや否やに歸着するものとす。

本來生を樂むべき人間が、何故に自殺するやを推究すれば、二類の原因を區別し得べし。精神錯亂其の一なり。秩序ある理論其の二なり。狂者の自殺、素より論題外たり。秩序ある理論を原因とする者に至つては、兎に角に條理ある意識狀態を原由とするが故に、吾人は理論の許す限り彼れが行爲に就いて研究せざる可らず。而して第二類の原因を細別して、個人性の不滿足、及び道德的の二となすべし。自己の不滿足より、世を厭ひ、人を怨むの念を生じ、終に一死、百難を救治すと解定して死する者は、前者を原因とす。之れに反して社會の秩序、道德、法律等に服從して、社會の一員たる自己と社會との關係上より自殺する者は、後者を原因とす。此の種、更に亦細別し得べけれども、今は暫く之れを略して、一言すれば、吾

人は此の種自殺者の場合に於いて、俊嚴崇高なる道德的理想の勝利を觀る。例へばオセロの自殺の如き是れなり。轉じて人生問題の爲に自殺せる者は、何種を原因とせるものなりやと問はば、予輩敢て言ふ、彼れ等亦個性欲望の滿足を得ざるが故に、寂滅を追求したる者に外ならず。即ち彼れ等は個人性發展主義を奉じて失敗せる者なり。

個人性發展主義、即ち所謂本能滿足主義は、ロマンチシズムが一面の潮流なり。彼れ等一派は、これを以つて人生問題の解答として、個人の本性に隨つて幸福を求め、快樂を得むとす。而して其の滿足の要石となる解答は、人々本來の性向、境遇、敎育、さては年齡に由りて幾多の差別あり。或者は愛戀を以つて其の基礎とし、或者は美を尙び、或者は自由を中心とし、或者は自然と呼ぶ。此の他精細

に檢し來らば、此の思潮の中尙數樣の解釋あらむ。然れども究竟する所、幸福を求めて、快樂を買はむと欲するに外ならず。彼れ等既に斯くの如く人生を解決して、是れを自己の上に現實せむとす。それ人生問題は、科學上の問題と異りて、其の解答は、必ずや主觀の裡に合躰融化せらる。客觀的に研究して得たる人生の答案は、忽ち主觀と合躰す。既に合躰すればこれを個人性として、其の伸張を好む。これ其の人の積極的態度なり。シュレーゲルが詩美と生活との一致を勉めたる、或はバイロンが社會の形式と戰ひたる、或は又シェリング、カロリナの手切れ事件の如き、皆な其の自我を滿足せむが爲に、道德、法律、習慣等一切の形式を無視したる者なり。かの『ロイベル』が主人公の行爲は、此の方面を代表して餘蘊なしと云ふべし。

斯くの如く積極的に自我本性を發展仲張して快樂を買はむとするや、或は成功するあり、或は失敗するあり。成功者固より滿足を得て得意ならむ。然れども失敗せる者、即ち自性の自由活動を遂行し得ざる者こそ哀なれ。彼れが世界は闇黑なり、彼れは無限の悲痛を感ず。是に於いてか積極的態度を一變して、消極的態度とす。なかれ主義、隱遯主義、孤獨主義等これより生じ、空想に空想を架設し懊惱の結果、最後に寂滅爲樂主義を奉ず。知るべし。死は消極的態度の頂點なり。愬に生きて苦痛を感ずるよりも、只一刹那の苦痛を忍んで自滅するは優れりと信ずるが故に、死を畏れず。されば死は拔苦の一手段たるのみにして、死其の物に意義あるに非ず。彼のエルテルは消極的生涯を樂む者の代表者なり。シェレルが『ロイベル』の主人公は、外部に向つて刃を振ひし者、エルテルは同じ刃を己が

胸に刺せし者なりと評せしは蓋し至言なり。げに多くの自殺者は、ロイベル的に進んで失敗せる後、エルテルに倣うて果敢なき快樂を求むる者なり。

人生の解決如何なりとするも、自殺者は畢竟個人の滿足を求めたる者に外ならず。然らば彼れ等果して稱讃に價するか否か。吾人は一種の證典(オーソリチー)に依りて評定するを好まず。何となれば彼れ等の眼中、始より自我本性の外に、何等の證典をも認めざればなり。故に吾人亦假りに其主義に服從して、之を研究せむ。夫萬人共通の性として幸福の生活を欲するは吻々を要せず。然るに此處に死滅を幸福と見做す者あり。彼れ果して本來の目的を達するだけの手段方法を試みたるか。これ冒頭に於いて質問すべき要點也。彼れにして十歩進行し得べきに、五歩にして挫折すれば、彼れは無能力者なり。十歩にし

て達すべきを意識し乍ら五歩六歩にして屈すれば自我發展に不忠實なる者なり。要するに彼れは、自我を發展すべき對境の爲に、却つて破られたる者に外ならず。秦の始皇或はナポレオンの意志を以て猛進すべき個性滿足主義の徒が、とかくに挫折するが如き、これ其立脚地より看て、當然排斥すべきものならずや。進化論者的に言へば生存競爭に失敗したる者、即ち彼れ等にして、吾人は寧ろ其の怯弱薄志を憐む。又若し自我發展の極、遂に餘地なしと言はゞ、吾人は再び其の人の狹隘なる眼識を憫む。天地は廣し、自我發展の場所は無際無限なり。其の無限の場所に向つては、到底自我は發展すべからずと言はゞ、其の人は既に自家の主義を棄てゝ他方面に安心立命を求めむとする者なり。

自殺者の價値は斯くの如し。吾人は自殺者自身の立場より看て既

に其の賞すべからざるを結論せり。然るに世人の或者は道德上の言辭を以つて或種の自殺者を稱讃す。余は問はむ何が故に金錢物質の爲に自殺せし者をも稱讃せざるか。人生の解釋を、自由とするも、戀愛とするも、金錢とするも、其の間何等の高下優劣を劃すべからざるは個性發展論なり。然るに尙ほ一を以つて高尙と見做し、他を指して下賤と言はゞこれ其の立脚地を離れて、他の標準を携へ來れるものと謂ふべし。若し是れをしも主義に愜へりと言はゞ、更に大なる標準無限に現せば（必ず現ず）終に自殺稱讃の基礎全たく崩壞せむ。例へば多くの智的分子を含める人生の解釋が高等なりと言はゞ、そは既に智の働を優等と認めたるものにして、更に高等なる理想の命令を遵奉せざるべからず。然らば終に其所謂個人性發展主義破滅して、自殺亦罪惡の一と論ずべきなり。

人生は不可解なるが故に死すべしとは條理なき言なり。人生問題を研究するは、頗る高尚なるが如しと雖も、既に不可解と嘆息して死を怡ぶは、これ亦本性の滿足を求めて、意を達せざりし者に外ならず。單に懷疑に留つて、不可解なりと謂はゞ、其の人は其の處に滿足を得たるものなり、即ち知識慾が、不可解といふ解釋を得て滿足したるものなり。然れども不可解の爲に煩悶し苦惱するは、未だ知識慾の滿足を得ざる者に外ならずして、其の極遂に死を以つて、懊惱の救治策とす。これ亦本性滿足主義徒の一人にあらずして何ぞや。

思ふに、本性（人生を解決したるものを躰したる）の發展は望むべからずと斷定し、或は人生は不可解なりと論斷して自殺する者は無意識の間に、自己を無上の力あるものと假定す。其の力の內容は

暫らく惜き、或者は自己の研鑽して發見し得ざる物は、亦天下の發見し得ざる所なり、自己の達し難き所は、亦天下の達し難き所なりと思惟して、毫も他の自我の性質と活動とを顧ざるが故に、終に自殺を以つて、唯一無上の求樂手段とす。嗚呼、淺見も亦甚しからずや。

死其の物を以つて人生の秘鑰とする者あり。例へば獨のノヴァリスが『人生は精神の病態なり』と大呼したるが如し。若し此の人にして自殺せば、其の最後の言は、人生は不可解なるが故に死すべしと云ふにあらで、人生の解釋は死なりと言ふに在るべし。これ死を以つて拔苦の方法と見做さず。死其の物を眞理とする者なり。然れども此の場合に、自殺を稱讃するは其の主義より見たる結果にして局外より論すれば、其の獨斷的人生觀を試驗して、多量の眞理を含

有するや否やを決定したる後にあらずんば、決して是非を定め難し未だ遽かに彼れを稱讃すべからざるなり。

斯くの如く論究し來れば、人生問題のために自殺する者は皆な積極的本性滿足に失敗して、消極的に之れを求めむと計りたる者に外ならず。而して人生の秘鑰と認むる解答には、其の主義其物より推及して何等の高下尊卑あらざれば、自殺者は皆な、稱讃せらるべき資格なき者なり。若し夫れ某の一人に向つて普通の讃辭を與ふるとすれば、物質上の不滿足の爲に自殺せる者にも、同一の敬語を拂はざるべからず。人生問題と云ひ、煩悶と云ひ、其の響や美なり。然れども其の美に迷うて、直に讃美の歌を謠ふが如き、輕佻淺見の甚しきものなり。

（三十六年八月太陽）

涓々錄

◎「吾れは人生問題に惱む」と言ふ人あり。只斯くの如く言ふのみなれば、予亦何をか謂はむ。然れども「世人は愚かなり、醉生夢死の生涯を送れり」と非難するに至つては、一言なかる可らず。人生問題は、萬人の懷抱する所なり。車夫にも、馬丁にも、乞食にも、實業家にも、政治家にも、等しく人生問題は有り。人生の研究何ぞ夫れ詩人哲士の專有ならむや。

◎「人生は不可解なり」と揚言す。思ふに金持ならでは、斯くの如く斷言し難からむ。何とならば、彼れ等は金を以て世を渡るのみにて、人生其物に接觸することあらざればなり。人生問題に懊惱する才子等よ。解決を得むと欲すれば、先づ一切の財産と資格とを擲つ

て、貧里に彷徨すること三四年なれ。然らば即ち光明自ら來らむ。

◎汽車汽船にて旅すればとて、旅行の味は、判じ難からむ。すべて人の造りし物を纏うて、世に立てばとて、爭て人生の眞相を看取し得べき。生れながらにして、財産、名譽の裡に育ちたる者は、遂に人生を解せざるべし。

◎「我れ裸にて母の胎を出でたり、又裸にて彼處に歸らむ」とは約百の言なり。此裸の覺悟あらざれば、遂に人生問題を解決すること能はざる可し。

◎裸の覺悟なき故に懊惱生じ、煩悶起る。而も煩悶を以て、いみじきものゝ如く思惟する者、多きこそ怪しけれ。煩悶とは畢竟ずるに長者の寢言なり。

◎釋迦も、基督も、其他多くの聖人賢者も煩悶せり、故に煩悶は

いみじ、との推理は立ち難からむ。彼れ等の偉大なる所以は、煩悶したるが故に非ずして、大悟せるが故のみ。いかに煩悶は大悟を生むの母なればとて、徒に懊惱の聲を發するが如きは、これ畢章、富貴名譽に飽きたる嘆語のみ。釋迦も基督も、人前にて煩悶しつゝありとは語らざりき。

◎宋の嚴羽儀、其時代の詩を罵つて曰はく『遂以文字爲詩。以才學爲詩。以議論爲詩。……用字必有來歷、押韻必有出處。讀之反覆終篇、不知着到何在。』と。彼れは其時代の詩が、形式の潤飾に流れて、詩趣を失ひたるを非難せるなり。吾が國、今日漢詩人の名ある人多し。されど此言を聞きて、赤面せざる者幾許ぞや。

◎米國の書伯ホイストラー、七月十七日を以つて長逝せり。彼れ米國に生れしかども、多く英國に住せり。米人は彼れが肖像又は傑

作を集めて、誇り顔に、大書伯を失へりと長嘆す。これ其作『吾が老母』がルクサムブールに藏せられ『カーライル』が倫敦美術館に陳列せらるゝが故なり。米人は、只一人の書伯を有するを以つて尚ほ世に誇る。吾が國書伯多しと雖も、未だ世界に誇るに足るべき大家なきを奈何せむ。

◎繰り返へす世なりとは古人吾れを欺かざるなり。近頃荐りにロマンチック文學の鼓吹あるこそをかしけれ。今の鼓吹者が、熱血を濺ぎて論ずる所は、『早稲田文學』『文學界』などが餘程の昔に唱へたることとなり。當時大學一派の如きは何等の語を放たざりしが、今日となつて同じ事を縷述す。今の急務は新ロマンチズムの鼓吹ならずや。然るに尚ほ舊ロマンチシズム其の儘を移植せむとす。時勢に遠かれるも亦甚しからずや。

◎ロマンチシズムの一派は青花にあくがれき。あこがるゝは可なりされど活動を伴へよ。今の世、何ぞ夫れ憧憬するものゝみ多くして活動する者の少きや。舌頭のみにてロマンチックを語る勿れ。何ぞ進んで實行を期せざる。議論の上にて其の詩趣を說くは既に遲し。自ら奮つて其の詩歌を作つて吾れに與へよ。

◎さても口のみの國民なるかな。到る所に名策講ぜらるゝと雖も、實行せられたるもの少し。教育も文學も美術も、實行を主とするに非ずんば、何れの日か進步の跡を示すべき。

◎吾れ頃日旅行して感あり。何ぞや。財を集むるに最も巧なるは佛敎徒なるとは是れなり。推知す。何事も宗敎と關係あれば、三四十萬圓の金員を集むること、決して難事にあらざるなり。見よ到る處には大寺院あり。寒村と雖も大寺院を有す。洵に人の靈性を司る宗

教なれば、斯くあるは、敢て怪むに足らざれども、其の力の大なることは、所謂本山を看て今更に驚嘆す。

◎されば若し今日、宗教と教育とが、相結んで全國の財力を仰がば、立派なる大學十數を設立せむこと、敢て難事にあらざるなり。されど斯くなり行かば、教育界が宗教界に服從したるものなり。吾が教育社會には、宗教界を征服して、其の勢力を奪ふの勇氣ありや否や。覺束なし。

（三十六年九月早稻田學報）

新思潮とは何ぞや

吾が文藝界には、新思潮起れりと傳へらる。長く惰眠を貪りつゝありし精神界に、此の報道あり、若し夫れ新思潮にして、眞に斬新

ならむ乎。眠れる者は醒め、渇ける者は療されむ。今の精神界は荒野なり、此の時に當つて新思潮と叫ぶ。その聲や、ジョルダンの河邊に傳へられたるヨハネが福音よりも、更に大なる響あらむ。然れども所謂新思潮なるものは、其の名に背かざるものなりや。はた吾人の服すべきものなりや。今は盲目的服從主義を尚ぶ世にあらず。說くものは命令法を以てすべからず。聞く者は研覈し、推理するの權利と自由とを有す。

『新』なる文字は、廣告的手段として使用せらるゝ場合あり。去れど斯の如き醜陋なる計略が、神聖なる文藝界にも利用せらるゝとは誰人も思惟せざる所なり。即ち此の美妙の音響ある文字は、歷史を回顧したる後、確信を以て用ひられたるものと云ふべきなり。

そも〳〵新思潮と稱せらるゝものは何ぞや。『帝國文學』記者、曾

て新ロマンチシズムなる語を用ひぬ。當時吾れ不幸にしてその語義を明確に知る能はざりき。然れども高山氏が『美的生活論』出づるに及んで、登張竹風子これを以て新學風の皷吹と見做し、その本源はニーチエの哲學なりと闡明し、これに次いで樋口龍峽子の『新思潮論』は『萬朝報』紙上に掲載せられたり。是に於いてか、吾人は、本邦の所謂新ロマンチシズムとはニーチエ主義、ニーチエ主義とは美的生活主義（藝術中心の生活主義）、美的生活主義とは新思潮を代表するものなるを、明瞭に意識するを得たり。さはれ斯くの如きを知ると共に、吾人の胸中には、幾多の新疑問こそ生じぬれ。何ぞや、所謂新思潮なるものは、幾許の價値を有するものなるか。其の新と稱するもの、寧ろ陳腐の思潮にあらざるか。進歩を目的とするというて、却つて退歩を結果するものにあらざるか。破壞を好んで

建設を排斥するものにあらざるか。眞の學問を敎ふと稱して、危險なる思想を扶殖せむとするものにあらざるか。吾人は茲に所見を述べて、先輩の敎を乞はむと欲す。

新思潮の研究に當りて、第一に掲ぐべき問題は、『新主義が現代の如何なる點に反對して起りたるや』ならざるべからず。吾人は此點に關しては、明瞭なる説明を下し難し。これ新思潮皷吹論者の議論多くは漠然として、要旨を捕捉し難きが故なり。去れど諸方面より考合すれば、論者の現代に關する觀察の要旨は、現代を以て個人性の壓迫、自我束縛の世なりと看るに在るが如し。而して往昔のロマンチシズムが、十八世紀の個性束縛主義に反對したるが如く、再び自我の自由活動を奬勵せむとするが、新ロマンチシズムの名、由つて起りし所以ならむ。

暫らくニーチェ主義の論ずる所と、求むる所とを聞かむか。現代は個人性束縛の世なり、本能を壓迫する時代なり。形式主義、習慣主義、道德尊重主義、平等主義、科學主義等、跋扈して吾人々類が本來の性質を矯めむとす。これ排斥すべきものなり。人の本性は快樂を追求するに在り。知識や、道德や、畢竟するに本能の滿足を得せしむる方便のみ。本能を滿足せしむる生活、換言すれば其の自由活動を得たる生活を美的生活と云ひ、人は將に斯くの如き生活を爲さゞるべからずと。

所謂新思潮皷吹者の要旨、骨髓を簡明にせむか。絕對的個人主義の奬勵と、知識及び道德の排斥と、感情及び想像とを骨肉とせる藝術を以て生活の中心とすることの三點、これにして、その主義を實際的生活に應用して、觀美の狀態に入りし者を、美的生活を送れり

と稱す。故にニーチェの所謂『超人』とは、斯かる生活に入りたる者と謂はざる可らず。

ニーチェ主義其のものゝ批評は、別問題として、第二に問ふべきは其の現代思想に反對すと言ふは、眞に反對と稱すべきものなりや否やに在り。所謂ニーチェ主義、即ち個人主義、本能至上主義、自我發展主義なるものは、時勢の反動なりや、或は時流に乘じたるものなりや。予輩は此の疑問を揭ぐると共に、論者が時勢に對抗すといふは、毫も其の主張の如くならざるを知れり。

十九世紀に於ける歐洲文藝界、否むしろ思想の傾向は如何ぞや。これ歐米の碩學が、夙に研究せし所、事々しく吾が輩の贅辯を用ふるの必要もあらざれば、今は其の要點を摘記するのみ。十九世紀の文學は、(一)革命的(共和的)、(二)中古紀復活(三)超然主義的(四)

科學的、以上四箇の思潮を含有せりと謂ふべく、これ亦た移して全般の思想に言ひ得べし。

人間は本來平等なり、高下貴賤の別あるべからず、前世紀の貴族主義、形式主義、作法主義、習慣主義等に反對して、之れ等を破壞し個人の權利を認め、且つ是れを確固たらしめむとするものは、革命的氣運にあらずや。シエレー、バイロン、ユーゴー、ジョーヂサンハイヂ等、文學に於いてこれを代表す。大陸に於ては加特力教理の再興を生じ、英國に於いてはオックスフォド氣運を呼び起し、文藝に於いては、擬古主義（クラッシシズム）に反對して、想像と感情との自由活動を尙び幽妙高遠なる或物を欽慕したるロマンチシズムの風潮を起したるは、中古紀復活の氣運にあらずや。十八世紀の偏智主義に對して、感官或は理解力以上に亘つて、崇高なる神的本躰に接せむと勉めたるもの、これ超然主義にあらずや。而して十九世紀後半に勃興したる一大氣運は、概念的を去つて事實を貴ぶ科學的思潮なり。

此れ等の傾向を總合して考思せむか。すべての傾向、氣運、活動は、個人の自由、個性の發展、個々人特有の性質の自由發展といふに歸着するにあらずや。自由平等を唱ふる裏面には個性の展開を希ふの念あり。超然主義を唱ふるは、個人の獨立を基礎としたるものなり。ロマンチシズムは形式內容共に個性の自由發展を特色とする風潮なり。科學研究は勝ち誇りたる自我の自由の行動に外ならず。されば歐洲の學者等は、十九世紀の文學を以て、自我の文學と謂へり。ゴッス氏が十九世紀の英文學を定義して、『個人主義（インヂヴィヂュアリズム）の時代と謂はむ』と言ひしが如き、ペリッジエル氏が『旺盛なる自我』なる語を以て、ロマンチシズムの特色を示し、『勝利を得たる自我』なる語

を以て、十九世紀後半の文學を評したるが如き、フヒヒテ哲學が、自我の權利を認めたるが如き、シユレーゲルが『詩人の不定性は、法則を知らず』と云ひたるが如き、以て十九世紀全般の文學に應用して誤なきを見る。これ文學の方面なり。爾も全般の思想を窺へば文學これを代表して、餘す所なきを見るべきなり。

既に歐洲の思潮には、如何なる方面に於いても、個人主義個性發展主義の横行するを見る。此の時に當つて、個人主義を說く。兒童と雖も、反動にあらざるを知るべきなり。若し夫れ强いて是れを現思潮より異れりと謂はむとせば、平等的個人主義(相對的個人主義)を進めて、絕對的個人主義たらしめむとするもの、所謂新思潮を代表するニーチエ主義なりとすべし。

ニーチエ主義は、歐洲思想の反動にあらずして、むしろ其の風潮

に從へる者なり。然らば我が國に於けるニーチエ主義の位地は如何所謂新思潮、新學風、眞學問を敎授すといふ主義は、吾が現今の思想界に反對するものなりや。その現代に慊焉たらずといふは是れを仇敵と見たる結果なりや、或は自家と同一なれど、たゞ幼稚なり不完全なりと觀じたる後の嘆聲なりや。

吾人は我國に於いても亦、個人主義の全盛を見る者なり。吾が國の思想界を、歐洲のそれと比較するに、大小の差異こそあれ、質に於いては、毫も異る所なきにあらずや。日本は歐洲の思潮に接してより僅に四十年を過ぎずと雖も、思潮の變遷に於いては、十九世紀の歐洲を縮寫したり。

維新の改革は、個人の權利を承認したるものなり。往昔の社會に於いては、一階級の中に、個人を屈服合順せしめ、毫も個性の伸張

を免さず、たゞ階級間の競爭ありしのみなりしが、今や個人間の角逐は、日毎に急劇とはなれり。殿樣の階級に在る人間は、人間の全性を殿樣的に合躰一致せしめ、侍や町人や、各其の階級に個性を服從せしめたる時代は、過去に屬し、今や人間の超殿樣的、超侍的、超町人的性質は、法典によりて確立し、其の超的性質の活動に對しては、何等の障碍あるを見ざるにあらずや。

吾れには言論の自由あり、信敎の自由あり。證典あつて、學說を束縛する莫し、型典あつて、想像や感情やを拘束する莫し、作法習慣あつて、行爲を規定する莫し。そも何を苦んでか、個性の發展を叫ぶぞや。個性の發展伸張を願はゞ、公然之れを試みよ。誰あつてか、是れを咎むべき。

暫く文藝界に就きて、個人性の伸張如何を眺めむか、和歌の傳說

的形式は、既に其の勢力を失ひたるにあらずや。萬葉を尙ぶ者は、萬葉調をとり、古今を尙ぶ者は古今調をとり、過去全躰を嫌ふ者は新調を案出す。かの『明星』歌人一派の如きは、ひとり形式のみならず、內容に於いても、個人の特性を發揮し、個人の感情と思想とを、遠慮なく表現す。これを俳諧の上に見よ。新派の旗幟飜るは、何事を語るものぞ。これ亦個人性發展を實行するものにあらざるか。新躰詩に至りては、更に個人主義獲勝の傾向瞭々たり。各の新躰詩家は各の形式を有するのみならず、戀愛、悲哀、憤怒、其の他一切の感情を歌ひ、想像を無限に走らするもの、これ個性の伸張にあらざるか。小說に於いて、理想に耽り、空想に迷ふもの、固より個性の好む所に從へるものにして、寫實小說を作らむとする者、また概括的を去りて、單個的に就ける者なり。斯くの如きの時に當りて、

個性、本性、本能の伸張、發展、自由を主張す。これを時勢に反對したるものと謂ふべきか。

獨り教育の社會に至りては、形式主義の跋扈するものあるが如くまた社會の一隅には平等主義の主唱せらるゝを耳にするあり。去れど教育上の形式主義、これ個人主義を以て反對するの價値あるものなりや。吾人は其の形式主義なるものは、十八世紀の社會、或は維新以前に於ける形式主義とは、全く其の趣を異にするものなりと謂はむとす。前代の型儀は、理の當否を問はず、兎に角に基礎あるものなりしかど、今の形式は、單に方便として造られたるのみ。古の形式は、其の物の内に眞理ありと唱へられたるもの、今の形式は試驗的に用ひらるゝの外に、何等の價値を有せず。されば其の形式なる者は、一般社會の善美として承認する所にあらざるなり。眞理と

して確立する者にあらざるなり。否むしろ形式と稱すべきほどのものは、未だ確立せざるなり。若し是れを破らむと欲すれば能ふべしこれに對して、何ぞや事々しく個人主義を唱へむとは。個人主義ならでは、教育界の形式主義を破り、其の弊害を去除すること能はざるか。更に其の敵視する平等主義とは何ぞや。これ根柢に於いて、論者が以て反對すといふ個人主義と同一のものを起點とする者にあらざるか。各個人の權利と幸福とを增大せむとするもの、乃ち平等主義なるを見なば、これに對して個人主義を說くは、既に後れたりと謂ふべし。

現代の文藝界には、歐洲と言はず、日本と言はず一世を風靡するほどの傾向或は學風は存立せざるなり。即ち個人主義の大勝利これなり。個人は自家の好む所に往き、慕ふ所に走り、求むる者を探る

も、何等の障碍をも感ぜざるなり。若し夫れ一大勢力あつて、個性を矯めむとするあらば、極力これに反抗して、所謂本能性の滿足を主張し實行すべし。然れども今や、斯くの如き大勢力ある學風なし擬古派の殘黨、ロマンチシヂムの崇拜者、ロゼッチー一派の新ロマンチシズム、寫實主義、自然派、理想派、歴史小說派等、各一方に勢力を有する文學界、さては實驗哲學、形而上學等の、共に滔々たる流をなす思想界に於いて、何を苦んで、個人性の發展を主張するぞや。

斯くの如く論じ來れば、所謂新思潮皷吹論は、世界の大勢に反對するものに非ずして、寧ろ大勢に乘じたるものなりと結論せざるべからず。さはれ精密に、論者の主張する所を檢すれば、所見の動機となりし者は、略ぼ推知するを得べし。何ぞや。科學的研究及び僞

善主義の二傾向は、ニーチエ主義崇拜熱を呼び起したるなり。此の故に吾人は、新思潮なる者は、個人主義を以て時勢に反對すといふを許さゞると共に、絶對的個人主義を以て、一部の思潮に反對し、貴族主義を唱ふるものと謂はむとす。

基督敎と言はず、佛敎と言はず、其の弊害として、僞善、似而非道德を生みしは、誰人も承認する所なるべし。然れども、其の僞善を憤りて、直に基督敎を罵り、佛敎を輕んじ、剩へ絶對的個人主義を主張するは、的なきに矢を放つものにあらざるか。僞善主義、瞞着主義、籠絡主義、僞君子主義を亡ぼさむが爲に、一切の倫理、宗敎を枯らさむとせば、先づ一切の宗敎、倫理の、到底信憑するに足らざるを闡明し、次で本能至上主義の說明と、眞理とを標榜せざるべからず。徒に天才家の態度を以て、空漠、朦朧、矛盾、撞着、齟

嘲、曖昧、罵詈、嘲笑を得意とするが如きは、果して眞の學問に忠實なるものなりや否や。

十九世紀後半の一大思潮とも稱すべきは、科學的研究これなり。科學其の物の進歩は言はずもあれ、これが爲に、宗教、哲學、倫理學、社會學、心理學等、一新生面を開きて進歩し、文學に於いては是れに由りて客觀の廣壯を知り、主觀の種切れに究したる時とて、所謂自然派、寫實主義なるもの起れり。然れども其の研究の多端、雜多にして、『煩瑣』なるは、吾人に統一的觀念を與へざるの傾あり。科學的研究、或は科學的氣運は、吾れ等に絶對的、神的、神秘的、超然的本躰を示さゞるの傾あるは、蔽ふべからざる所なり。然れども、これが爲に遽かに知識を蔑視し、歷史を滅ぼし、倫理學を嘲り再び感情と想像との世界に歸らむとするは、むしろ進歩を否定して

退歩を奬勵するものにあらざるか。

本能至上主義とは何ぞや。昔日のロマンチシズム一派が、感情と想像とを生活の中心としたるが如く、一切の形式を棄てゝ、自我（重に感情及び想像）の自由活動を尙ぶものなり。個人の快樂を絶對的に追求するものこれなり。是に於いてか吾人は問はむとす。科學的事實は、消滅せしめらるべきものなりや。科學的法則は、破壞せらるべきものなりや。自然法則は蹂躙せらるべきものなりや。若し夫れ科學的事實を消滅せむとすれば、歷史を無視するものなり。歷史を無視するとせば、發達を否定せむとするものなり。即ち復初主義これなり。然らば吾人は、如何なる程度まで、原始的に復歸するを得るやの問題新たに生ず。自然法則までをも蹂躙して、自我の發展を望むとは、そも〳〵如何なることぞや。これ新思潮鼓吹論者の言

はざる所なり。

科學的研究は、個物より進んで概括的を定めむとするものなり。個物は概括的に從つて、進化し活動せずんば、個物其の物の發達圓滿ならざるは、事實の證明する所なり。發達の目的が凝結せる本能（人類學上の義にて）ならざる人間に於いては、科學的法則に從つて（或は之れを基礎として）始めて個性の發展と、これに伴ふ快樂を得るは、倫理學、心理學、物理學の證明する所なり。個性の研究を忘れて、徒らに個性の自由伸張を希望し、（例へば肉慾に耽るが如き）絶對的個人主義を主張するが如きは、個性そのもの、墮落、消滅を（現世及び未來を通じて）暗々裡に希望するものに外ならず。又若し純感情、純想像を貴まば、文藝の發達は、遂に望むべからず。何となれば科學は藝術と衝突するものにあらずして、却て是れを輔佐するものなればなり。然るに尙ほ科學的研究を煩雜なり支離滅裂なりと謂ふものあらば、彼れは繁劇なる研究に堪えずして、我儘主義を取れる者なり。これ驕兒の學課に堪えずして泣き騷ぐに異らず。

無限の自我發展は、他を壓迫せむとする者なり、他に超越せむとする者なり。即ち貴族主義を尙ぶものなり。これ等は今日の社會を轉じて、羅馬の社會たらしめむとするもの、即ち歷史を無視したるものなり。個人標準の貴族主義、これ禽獸の世界に於いて存すべきもの、義務の客觀的存在を承認せざるもの、遂に社會を滅亡せしめずんば已まざるものなり。

美術のための生活、觀美の狀態、美的生活なるものは、單に本能の滿足を以て到達せらるべきものなりや。一切の知識、道德、信仰を無視したる本能の發展は、如何なる生活を來すべきか。藝術（是

れを純感情及び想像の産物と見て）を獨立せしめざれば、美的生活は、實行し難きものなりとの理由は、いづこに存在するものぞや。道德上、宗教上、或は智識上、理想を立てゝ、之れを趁ひ、之に入るは、亦美的生活と稱すべきものにあらざるか。かの新プラトーン派の哲士が、エクスタシーの狀態に入るが如き、美的生活として、承認すべきものにあらざるか。美的生活、余は之れを稱して本躰的理想（科學的研究結果の上に立てられたる）に接したる生活の景象なりとす。藝術獨立主義の如きは、單に詩人の感想に外ならず。理論としては、是れを許すべからざるなり。

要するに所謂新思潮なるものは、個人主義の氣運に乘じて此の主義を絶對的に擴大せむとする者なり。而して其の結論としては、自然法則の破壞、退歩主義、復初主義をとり、遂には自我の寂滅を來

さゞるべからざるに至るものなり。斯くの如きの思潮を、新といひ眞といひ善といふべきか。今や我等は、科學的研究結果の上に、理想を確立せしむるの道に就くべきなり、科學的歷史の上に立つて、人生觀を表現するシエンキヤッ、或はメレジユコースキーの歷史小說、或は寫實主義の上に人道、博愛の理想を示現するトルストイの小說、科學の上に無意識哲學を建設したるハルトマン等、皆これ新氣運の道路を開きたるものにあらずや。此の時に當りて絶對的個人主義、藝術至上主義を、空漠たる文字を以て傳へむとす。世路難を知らざる青年を誤らしむるの外に、何等の效力もあらざらむ。

往年上田文學博士『帝國文學』誌上に

「折角樂しい此の世の中を
堅い理窟でむがむにさざむ

野暮じや先生チョッと振り向いて
こちらの花でも見やしやんせ」

と歌はれたるを記憶す。今の本能至上主義なるものにして、此の詩の意味を、解釋したるものとせば、吾れ亦何をか謂はむ。果して然らば、余は『新』なる文字に、欺かれたる鈍物なり。敢て讀者の判定を請ふ。

（三十五年三月太陽）

個人主義

◎物質的個人主義の世中に立つ學者は、喰はむが爲に勉强する。創作家亦胃の爲に筆を運ぶ。固より當然の勢である。

◎さて其物質的個人主義を産むだ兩親は何者であらうか。何の因

緣で吾が社會には、斯樣な惡魔が跋扈するのであらうか。

◎善人必ずしも善人を産まない。維新の改革は謂はゞ善人であつたが、破壞といふ根性あつた爲に、淺ましくも此惡魔の祖先となつた。

◎改革と共に個人の權利が承認されて今迄は階級制度の中に、人爲法則の大束縛を受けて居つた人間は、自由の權利ある者と成た。

◎阿房でも、お家老樣たるを得る怪しい社會は滅茶滅茶に踏み潰されて、今や足輕でも、機に乘ずれば、殿樣をも凌ぐことが出來る世と成つた。

◎今迄は一社會と他社會、例へば甲藩乙藩との角逐があつたばかりで、個人は一社會内の犧牲に供されてのみあつた。

◎然るに改革と共に、一團躰は碎けて、個人々々が、鵜の目、鷹

の目で、己が進退すべき道路を考案するやうに變じ來つた。

◎面白いわ〳〵。公方樣でござれ、殿樣でござれ、侍でござれ、何で御座れ、何の怖るる所があらうぞ。腕次第の世の中とは今。

◎我が腕次第。彼も我も腕次第。憑む所は我が心身ばかり、天も裂けよ、地も碎けよ、我が一身たに野心を遂げなば、是で滿足々々。

◎げにや維新の改革は、すさまじい個人主義の社會を產んだ。仁義を行ふは、畢竟我が身の爲にする外何の目的がある。

◎『人を見たらば盜賊と思へ』との諺は、君子の言ふべき語ではあるまいが、維新後の社會には、益的中した箴言となつた。

◎此時に當つて我が文明を導いた案內者は、物質の進步を多年の宿願とした米國であつた。而も實利主義の大和民族を。

◎婦人を見れば、先づ容姿の美醜を定むるが人情の常。我が國民は、歐米文化の燦爛たる物質的進步に眩惑して、是が文明だと絕叫した。

◎哀れや、我が國民は、着物で文明開化を衒はうと圖つた。『武士喰はねど高楊枝』といふ尊い理想は、かき消す如くに無くなつた。

◎物質の方面ほど成功し易いものは無い。ペイ〳〵役人でも鹽を嘗むること一年にして、錦繡箪笥に滿つ。

◎此物質主義と、曩の個人主義とが結婚して、茲に物質的個人主義が、呱々の聲を擧げた。積不善の家に余殃あり。

◎個人が物質上の野心をさへ遂げ得たならば、これで人間の責任を盡し終つたのだと考へるのが今の社會である。

◎人間價値の標準は物質上に在る。物質上に失敗して落魄するも

のは、意氣地の無い愚物鈍物と有らむ限りの冷笑嘲罵を蒙らざるを得ない。

◎料理屋の女中は、下駄でお客の善惡を定むるが、我が社會一般の人物論は、實際下劣な女中の品定めと軒輊が無い。

◎此社會に遭遇した學者文學者の境遇。戰場に取り殘された赤兒よりも、一層危險で、一層愍然で、殆ど立脚すべき淺瀨がない。

◎學に忠ならむと欲すれば、貧窮に迫り、身に忠ならむと欲すれば、學に不忠となる、社會は精神界を、物質的利益の爲に頤使せむとす。

◎遺に物質界に屈從はしたくない。遺れるだけやつて見やうと猛進はして見るが、雨も降れば雪も降る。而かも社會は學其物を顧ない。

◎仕方なしに學問を應用する。喰はむ爲に切り賣を始める。これで一先づ安堵が出來るが、忽ち學界に一の濁流を浪たてた。

◎濁流とは曲學阿世ではない。物質主義でもない。予をして呼ばしむるれば、祕密主義即ち此の濁流である。學界の根本的病毒である。

◎我が學問思想を人に示しては、我が箔が剝げて、從つて物質上の利便を捕へる上に不都合を生ずる。これは秘して示さないが最上策。

◎遂に個人主義は精神界をも蹂躙して、世は全く牛の角突き合ひ人の苦痛は千年も忍ぶといふ下等動物のみが、東西南北に自利を計る。

◎嗚呼、此無慈悲の社會。前世の報と諦めても諦め切れぬ。誰が

パプテスのヨハネが役目を勤むる者ぞ、同情の曙光、何處よりか來らむ。

（三十四年七月太平洋）

自然主義とは何ぞや

腐敗せりとも鯛の形を具へなば、人の是れを顧るが如く、美しき物は、内容の如何に拘らず、世人の尊敬と賞讃とを受くること往々にして之れあり。任他いかに價高き鯛なればとて、先づ其の肉を檢せざれば吾人の食用とはすべからず。いかに嬋妍たる美婦なればとて、内心夜叉にも等しければ、振り返へりて見るだにも恐怖の念起らむ。今や吾が文藝界には、『自然主義』なる語、大に流行す。そは藝術製作の上にて、寫實的、或は經驗的と同一に使用せらるる自然

的の意味を含むものに非ず。乃ち『人間は自然的狀態を保つべきものなり』と言ふ一派の思想を指したる名なり。現社會に行はるゝ制度習慣總て是れ虚僞なり。人爲なり、僞善なり、非自然なり、人は自然性に從つて行動すべし、本能の動く所、本性の指す所、これ人の將に服從すべき所なりと主張する論者こそ、予が自然主義と名付けたるものを奉じたる者なれ。否、予が命名したるに非ず、論者自ら自然主義の大看板を掲げて、世に敎ふる所あらむとす。嗚呼、此の名や美なり、莊嚴なり。小町、衣通姫と發音すれば、想像上直に美人の浮び出づるが如く、一たび此の名を唱へ、或は耳にすれば、忽ち吾れに美感起つて、殆ど無意識に是れを捕捉せむとす。然れども靜思すれば（悲哉と嘆ずべきか）吾れに幾多の疑問生じて消えず否、今日消去せざるに非ず。吾れの如く心眼暗く、知識少き者は、

生涯を通じて、此の問題のために困まむ。若しも此の問題にして解決せられむか、吾れは一の新哲學組織を世に與ふるを得む。徒に名の美なるに眩惑せらるべからず。予は其の惑溺を避けむがために、茲に予一人の此れに對する思索の一端を記述して、疑問を提出す。先輩諸君、余が爲に解釋の勞をとらば予が幸福、何物かこれに若かむ。

自然主義なる名が、美妙の響あるは、自然界を聯想するが故なるべし。都會の塵埃に厭きたる眼を以て、或は壯大、或は優美なる山川草木の景を眺れば、一として妙ならざるは莫し。吾れ等の如き凡俗の耳目には感ぜざれども、詩人或は聖賢には、峯の色も、小川の流れも、樹頭の花も、水底の月も、囀る鳥も、悉く何等か奥妙の意味を現して、或は藝術とも思ふべく、或は教訓とも感ずべし。否、斯

くの如くに自然の風景を觀ぜざるにもせよ、風物其のものが、新鮮且つ信實なるは、拜金宗徒も、俗吏も、醜業婦も、生臭坊主も無我の小兒も、皆共に承認する所なるべし。況や詩想高きものをや今其の風景と實際社會とを對比せむか、水晶宮と塵溜との對比これなり。君子と小人との對比これなり。彼れには虚構なく、人工なく虚僞なく、これには細工、詐僞、譎瞞到る所に充ち滿てり。

こゝに於いてか自然を愛慕するの心生ず。天地の間には、美また善なる風景あるが如く、吾等人間性の中にも、善美の性あるべし、これ眞に人間の發展すべきものなりと。人間は客觀界に、永劫不易無垢清淨の天地を認むると共に主觀の内にも同樣の美性を發見せむとし、既に或る者は、これを發見し得たりとて、其れに從つて行動せむとす。庭園の草木を棄てゝ、山野の草木を愛するが如く、人は

現在の性を棄てゝ、自然性、或は本性に從はむとす。而して自然性或は本體を、物理界の美と聯關せしめて、以て無上の美とす。それ或は美ならむ。然れども是れを美と思ふは單に想像上の事にして、其の所謂自然性、或は自然的狀態を解決するに非んば、正確にこれを眞なり、善なり、美なりと謂ふこと能はざるなり。漫然と自然性を說くは紕繆の大なるものなり。否何等の意味をも構成せざるべし。若しも今日の社會制度を見て、不自然なり虛僞なりと悟らば、先づ自然性の何たるかを明記して、後に今日を攻擊せざる可らず。

吾人が消極的態度を以て、世に處する場合には、事々しく『自然性とは何ぞや』『本性とは何ぞや』の疑問を提出するの必要なからむ。たゞ山間に隱退して、人來らば『こゝも亦浮世なりけり』と、更に山深く走らば足れり。去れど苟しくも人間界の一人として立ち、自

然主義を標榜して社會に交らむと欲せば、先づ己が旗幟を明かにせざるべからず、積極的態度をとらむとする者は、先づ自家の見地を明かにせざる可らず。

此の必要より、吾人は自然主義を研究せむとす。而して吾人が解釋し得たる自然主義は、大別すれば三種あり。第一は復初主義なり、第二は自由主義なり、第三は自己發展主義なり。此の三者、いづれを以て眞の自然主義と見做すべきか。又三者各の根柢には、幾多の大問題横はらざるか。吾人は想像上の議論、或は感情の推理を好まず。たゞ事實と論理とに依つて、是れを究めむと欲す。

復初主義を以て、自然主義と見做すは、果して吾人の首肯し得べきものなりや。吾人は是を眞の自然主義として、遵奉し得べき乎。先づ其說く所を聞かむか。人類は虛僞、似而非文明の社會を破つて、

原始的狀態に歸るべしと。其の說や簡單なり、而して其の言に無量の味あり。都會の地を去つて、山間僻地に遊べば、其處に美はしき社會を見る。所謂『都の風』の吹かざる地、これ信實の社會なり。又幼兒少女が社會を見れば、此處にもまた美相あり。げに此れ等を觀じ來らば、所謂文明社會ほど、虛妄、不信、僞善を以て滿つるものあらざるが如く思惟せらるべし。されど斯くの如く觀ずるは、現社會に對して消極的思想を懷きたるに外ならず。若しも一歩を進めて、原始的狀態とは何ぞやと問はゞ、いかに是れを說明すべき歟。

ルーソーに從つて、同胞主義を奉じて、自由平等の行はるる社會即ち自然的なりと謂ふべきか、吾人は其の主張が、前提に契合せざるを非難せむと欲す。何とならば自由平等を確立せしむる同胞主義は、原始的狀態と言はむよりも、寧ろ進步したる社會、否理想の世

界なればなり。原始的狀態とは何ぞや。吾等をして言はしむれば、禽獸の世界なり、力の世界なり、腕力の世界なり。其の世界には、理想とするが如き自由平等は、決して希望すること能はざるなり。所謂强者の權利は無上の眞理として、飽く迄も無限に擴張せらる。平等を眞とし、自由を尙ぶもの、爭でか斯くの如き狀態を欲すべき。

假りに原始的狀態は、同胞主義たると、腕力主義たるとを問はず至善至美なりとせむか。更に吾れ等は斯くの如き狀態に復歸し得べしとせむか。活動止ることなき人間社會は、再び今日の社會を作るに至らむ。若しも人性を以て、靜止的と見做さば、その所謂原始的狀態は、地球破壞の末期まで續かむ。然れども人間社會は瞬時と雖も其の活動と變化とを停止せざる也。佛語を借用すれば、これ無常

の世界なり。此くの如き世や、人々が、ショーペンハウエルに從つて、意志を刺殺し、寂滅せしめずんば、流轉變化(進步なる語を嫌ふとすれば)して停る所あらざるべし。而して其の意志の否定は、獨逸の厭世家に次いで、ニーチエの意志肯定說の出でゝ世人を感化したるが如く、個人としても或は人類社會全體としても、其の儘を以て止まらざるは、火を見るよりも瞭かなり。是れ吾人が社會を原始的狀態に還さむとする說に左袒し難き點なり。否、余輩をして言はしむれば、復初說なるものは、理想の世界と、朧朦たる過去とを混同して、理想世界即過去世界と觀じたるものゝみ。これ猶ほ儒敎にて、理想世界を、堯舜の世に附和して說くが如し。堯舜の世は實在せるものにあらざるが如く、原始的狀態も、亦事實に於いて存在したるに非ざるなり。

社會を原始的に還さむとするの說は、余輩の會得し難き所なると共に、個人の復初主義即ち自然的狀態に復歸せよと敎ふる說も亦、吾人の承認し難き所なり。何とならば、先づ第一に、原始的、或は自然的本性とは何ぞやとの疑問を解決するにあらずんば、其の說は、立脚し難きものなればなり。ルーソーは此の問題に對しては、感情本位說を打ち立てき。去れど彼れは、偏智主義の世に對抗せむがために感情を以て、自然的本性と言ひたるのみにて、後人より見ればこれを以て、決して滿足すべきにあらず。感情なる文字に、特殊の意味を附加して、而して是れを以て行爲の羅針盤とする場合は特別なり。例へば感情には意ありと假定して、是を主張せば、更に其の點に就きて幾多の議論を要す。然れども單に心理學的に論ずる場合には、感情のみを以て、自然的本性なりと言ふこと、黑を白と言ふよ

りも困難ならむ。即ち依然として在留するものは、自然性とは何ぞやとの問題なり。

假りに原始的狀態を最善とし、個々人は其の本然の性に服從し得べきものと定むるも、これ實際上に於いては、決して實行し難きものにして、其の理たる、數理の如く自明なり。左にヴォルテールの言を引用して余輩の是れに反對する意を明かにせむ。

『ヴォルテール嘗てルーソーの不平等論を讀みて曰く公の此書を一誦するときは摸寫の妙實に人をして野獸に倣うて匍匐するとを願はしむるに至れり獨り奈何せむ余や步行に習ふこと此に六十年なるを以て復た匍匐せむと欲するも得可らず想ふに公も亦應さに余と同じかるべし』(故中江篤介譯佛人フーイエー著「理學沿革史」下卷五五八頁)

復初主義には幾多の疑問殘りて、到底吾れ等を滿足せしむるに足らず。然らば是れを棄てゝ自由主義を奉ずべきか。

自由なる文字ほど、數多に解釋せらるゝは少かるべし。去れど茲に使用せるは、俗語に言ふありのまゝと同義なり。餓ゑて食を求め渴して水を覓め、さては婦女を欲し、或は怒り、或は泣き、或は笑ふ等、現在の心狀態又は衝動に從つて行動するを、自然主義と稱すべき乎。例へば評判高き露のゴルキーが書きしが如きフォーマを以て、自然主義を實行したる一人と謂ふべきか。彼れは衝動のまゝに動ける人物なり。其の婦女を愛するも、或は罵詈を逞うするも、或は絕望の淵に沈むも、或は罪惡を犯すも、或はウォドカに耽るも、或は爭鬪するも、皆なありのまゝなり。心の動くまゝにそれを行爲に現したるなり。今此くの如きを以て自然主義を實行したるものと

せむか。又斯くの如きを以て自然主義なりとせむか。吾れ等、果して是れを以て滿足すべきか。

ありのまゝ主義は、不定のものたり。此の主義を奉ずれば、今日の敵も明日は味方となり、今日の妻も明日は毒婦となる。吾人は不定のものに、安心立命し得べきか。吾人は、朝夕に位置を換ふる浮草の如き狀態を以て、果して滿足すべきものなりや。個人として考ふるも、或は社會として、或は國家として思念するも、恒性（變化の中に不定性ある義なり）なき狀態を以て、滿足するを得べきか。草木禽獸の如きは、皮相の觀にては、所謂ありのまゝ主義を取れるものゝ如し。然れども彼れ等には、隱蔽すべからざる恒性あり。これ神意に由れるか、或は彼れ等の造詣になれるか、吾が輩之れを知らずと雖も、兎にも角にも彼れ等の内には恒性あり。然るに人間界

のみ恒性なくして、而も克く安心し得べきか。吾人之れを信ぜざるなり。たとひ如何なる自由主義、我儘主義、獨立主義を奉ずとするも、心中之れがために幾百萬の懊惱なき能はず。されば自由生活を唱ふと雖も、遂にはフォーマの如く

『吾が生活とは何ぞや。そは意味なきなり。吾れは只一人生活す。吾れは何事をも解せず。然れども吾れは何事をか望む』

と歎息せざるを得ざる可し。

既に安心立命の地を求めむとすれば、其の地とは、果して如何なるものなりやとの問題生ずべし。ここに於いてか、吾人の謂ゆるありのまゝを分解せざるべからず、しかれども此の自然性を解剖し來らば、混沌として遂に要領を得ること難からむ。何となれば、其は心理學、政治學、社會學の研究を待つて始て完かるべく、而して其れ等

科學の研究を採用すれば、單に虛僞ならざらむとが、自然主義となるべければなり。然らば自然主義とは甚だ複雜なるものなり。即ち表現の心狀態より、進んで再現のそれとなり、結合のそれとなり、思索のそれとなり、感情の方面に於ては、下等感情より進んで想念感情に至るまで皆な心狀態にして、其れ等各の階段に從ふ意志の發現あり。從つて自然主義なるものゝ中には、幾多の種類或は階段を生ず。

『我が父よ若しかなはゞ此の杯を我より離ち給へ。されど我が心の儘を成さむとするに非ず、聖旨にまかせ給へ』と叫びて、全世界の民を救はむがために、ゴルゴタの十字架に死せしナザレのイエスは自然主義の人なり。而して金錢のために其の主を賣りしユダも亦自然主義の人なり、釋迦もそれなり、提婆もそれなり、常磐御前もそれなり、靜御前もそれなり。これ等は皆な其の現在の心的狀態に忠

實なりしものなり。されど斯くの如き幾層の狀態あるを見れば、何れを以て眞の自然主義と見做すべき。はたこれを決定する標準とは何ぞや。即ち自然性、或は本性とは何ぞやとの問題起る。

所謂自由主義の缺所を補はむが爲に、第三の自我發展主義なるものあり。自我を暢進せよ、自我の圓滿なる活動を目的とせよ、とは吾人の屢々聞く所なり。然れども其の自我とは果して何ぞやと問はゞ、此の自然主義者は如何に答ふるぞや。自我なる文字に哲學的見地あらざれば內容甚だ貧しきものなり。即ち單に、本性、或は本體といふに外ならず。從つて之に內容を與へざれば、自我發展主義は無意義のものたり、而して其の自我に意義を與ふるとせば、反對せるものを、此の內に生ぜしむるを得べし。而して自我を心理學的に解釋すれば吾が心狀態の連續に外ならず。

利己を以て本性と見做すを得べし。或は利他を以て其れと言ふを得べし、人間の自然性は『個人の生活の爲に競爭す』るものとも言ひ得ると共に、『他人の生活の爲に競爭す』るものとも立言し得べし。或はニーチエの如く絶對的個人主義を以て、自我發展主義とすべく或はグリーンに從つて、宇宙精神の一部我が內にありて、之れを圓滿ならしむる主義、即ち自己實現主義を以て、其れと主張するを得べし。若しも自我なる文字に惑はずして、是れに對せむか。幾多の解釋生じて、遂に何れを自我の本體と定むるの難さを見む。

あらゆる說の根本に橫るものは、『自然性とは何ぞや』との疑問なり。復初說を唱ふるも、或は自由主義を主張するも、或は自我發展主義を眞とするも、其の根抵には、本性とは何ぞやとの問題生じて消えず。而して其の本性を定むる上に於いて、數多の解釋生じて、

遂に何れか眞理なるを確定すること難さを感ずるに至らむ。

本性を定むるに當りて、吾人々類を、單に自然界の一產物と見るの方法もあらむ、或は人間には物質界以上の或る物ありと主張するも得む。即ち物質論者の說も一理あらむ、而して精神論者の所說も聞くべきものあらむ。而して其の孰れかに由りて、甲の自然主義と、乙のそれとは、氷炭相容れざるものあるべし。否、甲乙相容れざるのみならず。甲は甲の理由を有し、乙は乙の理由を保つ。

第二に本性を以て、靜止的に解釋するものあり、而して別に動的に說明するものあり。若しも前者に從はむか。進步を口にすべからず。されば一切の文藝を破棄し、道德を蹂躪し、科學を排し、哲學を退けざる可からず。斯くの如きは、果して吾人の承認し得る所なりや。世俗の所謂進步を以て、本性を腐敗せしめ、墮落せしむるも

のとせば、ショーペンハウエルと共に、意志の寂滅を唱へて、遂に本性其の物をも消滅せしめざる可らず。何となれば人は其の性として、活動を好むものなるに、而かも活動は本性に悖はずと言ふが故なり。

第三に本性の內容を定むるに至りても、亦幾多の解釋用ずべし。之れを意慾ともいふべく、智ともいふべく、感情ともいふべく更に全意識ともいふべし。純正哲學見をもとるべく、心理學見地をも定め得べく、更に之れを倫理的に觀ずれば、孟子に從つて性は善なりと揚言するを得べく、或は荀子に從つて、性は惡なりと主張するを得べし。吁、吾人は如何なる解釋に從つて、自然性を定むべきか。』

根本の根本に據る問題は、人間性は自然界の一產物なりや否やに在りにありとす。此の問題の十分に解決せらるゝに非ずんば、吾人

は自然主義なるものを口にすべからず。げに本性問題に對するや、吾人に批判の心生ず。而して余一個人の思考より言へば、余はグリーンに從つて、人間性を以て自然以上の精神と見做さむ。何となれば吾人は、結果を以て結果を說明すること能はざればなり。即ち吾れに一大精神の一部あり。而して此の自己精神の發現を以て人生の目的とす。即ち自己實現主義これなり。而して其の實現せられたるものは、制度道德法則等也。されど是れ今詳述するに餘地なし。たゞ世上に自然主義なる文學の流行するを見て、主張者は果して、什麼の見地あるかを問はむと欲す。『自然性とは何ぞや』とは古今の大疑問なり。先づ是れに向つて解釋を與へよ。由來吾が文壇は輕薄なり、早呑込主義の流行する場所なり。自然主義の如きは、文學上及び哲學上の大問題なり。名の美に眩惑せられざりし諸氏よ、吾が爲

に、吾が掲げたる問題『本性とは何ぞや』を解説せよ。余は其の解釋に向つて、更に幾多の質問を提出せむと欲す。今は只諸氏に向つて、解説を求むるのみにて、吾が論旨の空漠たるは、これがためなり。若しも漠然と自然主義を唱ふる人あらば、吾人先づ其人に向つて『己れを知れ』との格言を呈せざるを得ず。而して最後に一言せむと欲す。自然主義なるものは、複雜なる社會に立ちて重荷を負へる苦痛の聲にあらざるか、戰鬪の力なき弱者の歎聲にあらざるか。

（卅五年二月明星）

美的生活とは何ぞや

高山樗牛君は『太陽』（第七卷第九號）誌上に『美的生活を論ず』と題して、人生の目的は、道德や知識の「煩瑣にして又餘りに迂遠なる」ものを求むるよりも、美的生活を送るに在る。畢竟するに道德と知識とは相對的價値があるのみで、ひとり絶對の價値を保つて居る者は、美的生活である。其美的生活とは、人性本然の要求を滿足せしむるものであると說かれた。氏は言はれた、

「……生れたる後の吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり、幸福とは何ぞや。吾人の信ずる所を以て見れば本能の滿足即ち是のみ、本能とは何ぞや、人性本然の要求是也」

吾人に最大幸福を與へ得るものは、道德と理性とではなくて、實に本能である。其本能の要求を充實して行くのが美的生活と謂ふ可きであると。

高山君の謂はれた通りに、楠公の湊川の戰死、菅公の君恩に感謝する點、貞婦が夫の爲に身を殺す點等は、其各の場合に、忠貞等の

道德的理想を意識して、行つたのでは無いかも知れぬ。亦人間の心性から推して考へるも、各の行爲が、一々理性、或は知識、或は理想から割り出されるものではない。否、一の行爲に出づるたび毎に理性の判斷を聞いて居るやうでは、此復雜なる人間社會に立つて行く事が出來まいと思ふ。同じく左側を通行するにしても、一歩毎に警視廳令を見たならば、寧ろ苦痛を感ずる場合が多いであらう。こゝは本能的作動に出づるので、始て困難なしに、通行することが出來るのである。

正成、菅公、或は孝子、烈婦の場合でも、其行爲は、殆ど本能的であつたであらう。從つて古名家の一世一代の行爲を、腐儒のお談議で解釋しやうといふは、固より誤つても居る、亦愚の極でもある。然しながら、此點から推して、本能の要求を滿たす行爲の連絡が、

美的生活であつて、知識や、道德やの迫求は、相對的である、其物の價値は薄少であると斷言するのも、亦誤謬であると言はざるを得ない。

假りに高山君の所見に從ふとしたならば、隨分奇妙なる結論が出るではあるまいか。而も其結論中には、高山君自身も豫期しない程、奇怪なる物が有るではあるまいか。

高山君は人性本然の要求を、本能と名付けられた。去れば其本能とは、甚だ廣い意味で、是を分解したならば、性質上では精神的と肉體的との二つで、其廣さの上では、普遍的人性と個人的人性との二つが區別されねばならぬ。而して其個人的人性の中にも、人類學上の所謂遺傳的本能性と、習慣的性向とを差別しなければなるまい。そこで本能を滿足して行く所が、美的であると謂ふならば、一個

人の行爲は、悉く美的であると推理して毫厘の行違ひは無い筈である。

高山君は、疲勞の後の晩酌(但し淸風江月に對して)音樂を聽きながら、美人と共に在る場合等を例として、是が本性の要求を滿たした美的生活で、其快樂は、哲學書一卷を讀破した愉快、貧人を憐み孤兒を助けた快感よりも、更に莫大なるものであると斷言された。勿論是等の生活には快樂がある。洵に美的である。然しながら他に二三の例を擧げたならば、人間本性の要求を充實する事が、必ずしも美的で無いといふことが證據立てられるではあるまいか。例へば敵を見て逃げ出す人は、生命が惜しいといふ、人間一般の要求に基いて、之を滿足せしめた者であるから、其行爲は美的である。色情の奴隷が、異性を追ひ廻すも、亦其個人的性向を滿足せしむる者で

あるから、美的である。高山君は果して此等の例をも美的であると承認せらるゝであらうか。

人間の本性に基いた行動にしても、快樂を伴はぬ者がある。依つて高山君の說を推し廣げて快樂の隨伴する本能的行爲のみが、美的であると言ふは、强ち不當では有るまい、然しながら快樂の强弱大小を言はれる所を見れば、茲に其標準は、いづこに在るかを究めねばならぬ。時間の長い快樂を追求するのが美的であるか、或は度は强くとも、時間の短い快樂を得るが美的であるか、太く短くと世を送るが、美的生活であるか、或は細く長くと計畫するが美的である所が有る。而して此兩種の快樂を引き起す行爲は、性質に於いて、全く異反對する行爲に出でなければならぬ。永續する快樂を求むる場合には、多くは人間の本性に反して强度短時間の快樂

は、多く体機性の要求に從ふ行爲に伴ふ。然らば其孰れを追求するが美的生活と成るのであらうか。

高山君は美的生活の例として、眞理其物の研究を無上の樂とする學者、金錢其物の貯蓄を人生の至樂とする守錢奴、月光を浴びつゝ薔薇花の籠の蔭で戀情を語り合ふ男女の狀態、印度の瑜珈派の修行者等を擧げられた所を見れば、孰れの快樂でも構はぬといふ說らしいが、果して然らば瑜珈派の修行者が、解脫の快樂を得るために、人間本能の要求を斥けたものを、何故に美的といふのであらうか。氏の說では、顏回が陋巷で勉强して居つたのも、ステファノの未路も、大石良雄の艱難辛苦も、皆非美的生活で、極惡無道の盜跖、基督を賣り渡したユダ、腰を拔かした大野九郎兵衞等が生涯は、却て美はしき者であると推論しなければならぬ。從つて、氏の擧げられ

た正成、菅公の生涯は、頗る無味の者で、氏は如何なる前提から、之を美的生活の例として掲げられたかを怪まざるを得ない。

吾輩の考ふる所では、氏は人間行爲の景象をのみ觀じて、其內容を棄て、直に美的生活を說明しやうと試みられたが故に、論旨に矛盾を生じたのであらう。固より人間は美的に生活しなければならぬ。然しながら其美的生活といふは、他人の目に映ずる景象で、豫め其內容となる者が無からねば、決して美相を呈する事が出來ぬ。

知識上或は道德上の理想が確立して、是に向つて進む生活は、即ち美的として現れる。更に詳しく云へば、理想に向ふ行爲が、習慣的となる所が美的として、千歲不滅の光明を放つのである。正成も菅公も、共に忠といふ理想を畫いて、是に向ふ行爲が殆ど習慣的であつたればこそ、其行爲が美的と成つたので、芳名を今日に傳へた。

たとひ理想があるにしても、是を追ふ行爲が、瞬間的であるならば、其場合は兎も角も、人生一體としては美相を呈せぬ。美相を呈す生活と言ふは、片時も理想を忘るゝことなく、勉めて之に向ひ、遂に其一擧一動が、習慣的となる場合に在るのである。而して此點が亦科學の所謂本能的活動には、美相がないことを確かめる。

役者が正成の役を演ずる場合には、光づ正成の意志が、常に忠義といふ理想に向つて、毫も其道筋を外れなかつたことを承知せねば、到底美的動作に出つることは出來まい。それと均しく人生も、何等かの理想を認めて、飽く迄も之を追求し、其行爲が遂に習慣的と成る所に、初て美相を發揮するのである。猿芝居の直實と、人間の芝居の直實とに、相違のあるものは何故であるか。詩人の畫いた愛と色情に溺れた者の行爲とに、天地の差別あるは何故であるか。理想

の有無が、其原因であるは、誰しも承認するであらう。

知識的並に道德的理想は、絶對的價値の有る者であつて、其内に生活すといふが、一面より言へば、理想を習慣的に追求するのである。而して是が美と現れるので、即ち美的生活の内容は、智德の理想其物である。老子の所謂『大道廢れて仁義あり』といふ場合の仁義は、無論道德的法則(惡人を誡むるための)のことで　全文の意味は道德其物の價値を無視したものではない、否寧ろ道德的理想の無限の價値を示して、道德的理想、即ち大道に復歸して、習慣的に（飲食物に對する行爲の如く）德行あれと示したので、爰に至つて初て美的生活が表出するのである。

人間の本性の要求といへば、既記の如く、隨分廣いもので、其滿足は決して美とはならぬ。若しも成り得るものならば、苟くも人た

る者の生涯は、悉く皆美的である。然しながら美的生活といふものは、寧ろ人間本性の要求を斥けて、理想的要求に向ふ所に成立する。勿論客觀界に於ける動作にして、吾人の美的と認むるものがあるが、是は吾人の理想を、其物に移轉せしめて觀ずるが故である。

要するに高山君は、習慣的に理想を追求する一生の行爲を見て、直に人間本性の要求を滿足せしむるが、美的生活となると結論されたので、誤謬の原因は、習慣的を、直に本能的と解釋された所に在る。而して吾輩の見る所では、美的生活は、一の景象で、是の生ずる所以は、知識上、或は道德上の理想中に生活して、其生活に衝突する人間本來の要求を刺殺して行く所に在る。即ち或一人の生活の內容は、常に理想を包有して、之に從つて習慣的行爲に出つれば、其外形は美的と成るのである。

高山君は結論として『今の世にありて人生本來の幸福を求めむには、吾人の道德と知識とは餘りに煩雜にして又餘りに迂遠なるに過ぐ』とて、人間本性の要求に從つて、美的生活を送れと言はれたが若しも其通りに世人が行動したならば、氏自身も排斥せらるゝ物質主義が、益勢力を得て、さなきだに物質主義の吾が社會は、終に精神なき穢土と變化するであらう。（三十四年八月讀賣新聞）

無用の辯

（帝國文學記者に物申す）

◎高山樗牛君が太陽誌上に物された『美的生活を論ず』と言ふに對して、吾輩が及ばずながら二三の質問を申上て、且つ自分の立場

を明かにして高山君の教を受けやうと思うて居つた所が、豈計らむや、『帝國文學』記者は、高山君の御答もない中に、説明の勞をとられた。洵に御親切の段は幾重にも御禮を申上げる。然し御教示に對して、少く腑に落ちぬ筒所があつた。

◎記者の言はれた所を摘んで申さば、高山君の御説はニーチエを根據として居るのであつて、實に徹頭徹尾贊成すべきものである。然るに尙疑問を設けて、反對の論を唱へるなどは、畢竟ニーチエを知らぬからのことである、と云ふのである。

◎高山君が、ニーチエの哲學を採用して、あの一大論文を草されたのか、否かは、吾輩の知らぬ所である。高山君がニーチエであらうか、何であらうが、何か憑據とする所あつて論述されたにもせよ、吾輩は、同君の論文其物に就いて、卑見を述べたばかりのことである。亦斯く行くべきが當然であらうと思はれる。且つ吾輩から見れば、彼の人は何の説に據つて、其を隱家としたのだ、などと横から口を出すのは、寧ろ高山君を侮辱した者と謂はねばならぬ。

◎そは右も左も、ニーチエの論に立つて居るから、高山君の説は確かな者であると、揚言された記者の心は、吾輩の解するに困む所である。親の勳章を持ち出した兒を見て、あれは親の勳章を持つて居るから剛いと言うたならば、記者は定めて其愚を嗤はれるであらう。

◎記者の言はるゝ通り、吾輩は淺學で、ニーチエとやら云ふ哲學者を存ぜぬ。然しながら、其ニーチエは、日本内に於いて、いかばかり證典として尊敬されて居るのである乎。

◎耶蘇教國に在つて、基督論に反對を試みたならば、それは聖書

を知らぬからである、聖典には斯樣々々の章句があると言ふも宜しからう。然しながら耶蘇教國以外に在つては、去樣な辯解が、果して正當の者として通用するであらうか。

◎其と等しく、未だ眞理として一般の承認をも經ぬ者を、擔ぎ出して、彼には云々の語あり、論あり、故に此論說は誤謬なしと云ふは、當然の推理としては立つことが出來まいと思はれる。

◎ニーチエには、何程の眞理があるか。其個人主義は、矛盾の無い者であるか、或は一切の事實、現象（過去現在に亘りて）を說明するに足る者であらうか、此等の點は、ニーチエ教國に在りとすれば、無論萬古不易の眞理として尊敬すべきであらうが、其以外に於いては、先づ試驗すべき必要があるでは、あるまいか。

◎爾も左樣の事には頓着なく、ニーチエが言ふ所に立つから、宜

しい、誤がないと主張される記者には、日頃に似氣もなく、子供らしい、獨斷說を吐かれたものと言はざるを得ない。

◎故に吾輩は、更めて記者に說明を求めやう（記者をニーチエ教徒と見做して）ニーチエの所謂自由本能の滿足といふことが、楠公の討死、貞婦孝子の行爲を、美的生活であると、說明する事ができ是に反して人間の本性に從うて、戰場から脫走する者、新らしい亭主を尋ねる者が、非美的であると說明し得るであらうか。いかに。

◎畢竟するに、記者の御說明は無用の辯であつた。其蛇足の辯に就いて、貴重の紙面を汚した吾輩の言も、亦無用であるかも知れぬ

（三十四年九月太平洋）

ニーチエ主義と美的生活

曾て高山博士の美的生活論に對して、をこがましくも質問を設けた所が、『帝國文學』記者は、傍から高山君の御說を、ニーチェ哲學の上に立つて、辯護された。因て吾輩も其時同誌記者に向つて、『太平洋』誌上に僅かな答辯を試みた所が、記者は近刊の誌上で、再び予に向つて、批評を下された。洵に文字の使ひ方も知らず、語調も辨へぬ拙者の事とて、お氣に觸つた箇所もあるらしく見受け申したが若し果して有りとすれば、其段は幾重にもお詫を申しませう。然しながら學理の上では、未だ腑に落ちぬ箇所が御座るに依つて、改めて御說明を願ひたい。

先づ第一に申上げたいは、記者は予輩の希望した事に就いては、何等の說明をも下されなかつた事が、甚だ遺憾である。記者は曩に高山君はニーチェを採用されたから其論は聞くべしであると申され

た、依て予輩は、然らばニーチェは、どれほど證典として採用されべきである乎。ニーチェの言ふた所は、果して事實を證明するに足るであらうか、ニーチェの哲學を基礎として、割出した美的生活、例へば楠公の討死、孝子節婦の献身的行爲を、美として說明する事が出來ませうかとお尋ねを致した次第で、此點を充分に御說明なき以上は　縱令數萬言の御小言があるにもせよ、拙者に於いては左樣然らばと拜聽することが出來申さぬ。所が近刊の誌上で記者は『高山君の說はニーチェを知れるもの、最も其妙なるを感ずべしとこそいひたれ、未だ嘗て高山君の說は、ニーチェに基けるが故に眞なり賛すべしといひたることなし』と言はれた。『妙』『感ず』といふ語はやがて『眞』『賛す』と夫婦に成るべきものではあるまいか。よし別物とするも、斯く揚言せらるゝ記者は、ニーチェ哲學が、美的生活

を、說明するに足るものとの理由を標榜する義務が有るでは御座るまいか。若し左もなくば、記者の論は、感情一遍の說であつて、決して吾輩の主張に向つて、云々するの資格が無いものと謂はねばならぬ。

とは云ひお言葉の中に、『帝國文學』のニーチエに關する論文を讀めとの意味が聞え申したに因つて、茲に、予輩が解釋したるニーチエ哲學は、果して美的生活論の基礎となるべきもので有るか、否かを申述べたいと存ずる。

第二に記者は、予輩が、人類學や、心理學やの上に立つて議論すから、高山君の本旨が解し得られぬのじや。高山君は心理學などを棄てゝ、ニーチエの哲學を本とされたのであると言はれたゞさて〳〵不思議の筆法もあれば有るもの。予輩は高山君御自身の說明に從つて『本能』を解釋致したので、何も自分勝手に、こぢ附けた次第ではない、さて其上に自分の立場を定めて掛るのは、是れは自分の勝手次第。人類學や心理學やの研究が、非眞理として排斥されぬ以上は、これに依るも何の不都合があらうぞ。イザ立合と成つて、眞影流でやらうが、一刀流で構へやうが、それは全然個人の權內に在ることで、其を惡いと謂ふならば、先づ其前に、敵者の基礎は、石では無い砂であると、明細な、太刀風を見せねばなるまい。然るに記者の御說明中には、斯樣な凜乎たる威風を認めぬ。去らば予輩は根のある限り、自分の立場を動かさずに居らうと存ずる。

然し此等の點は、枝葉の論で、爭ふも益のなきことであれば、是は別に措き、眼目たるニーチエ哲學と美的生活との問題に這入ませう。

記者の御說では、ニーチエの所謂自由本能に從ふて活動するのが美的生活と成るのである。高山君が『幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば、本能の滿足即ち是のみ。本能とは何ぞや、人性本然の要求是也。人性本然の要求を滿足せしむるもの、茲に是れを美的生活と云ふと言はれたのは、取りも直さず、ニーチエの說を敷衍したものであると。果して是が矛盾の無い論法であらうか。假りにニーチエ敎に服從するとしても、斯くの如く主張するが、開祖ニーチエの主旨に契合するものであらうか。勿論或種の生活の美なることに關しては、高山君も記者も、予輩も一致して居るのである。例へば嘗公、楠公、孝子、烈婦の生涯などは、洵に優秀美麗なるものであることは、お互に異見の無い所である。故に今の問題は、ニーチエ哲學が此美的生活。詩人が歌ひ、道學先生が賞揚して止まざる

立派な事蹟を、美として說明するに足るか否かである。

記者が尊ばるゝ自由本能とは、如何なるものであるか。ニーチエの哲學では、『超人間』は意志が本能の發動するまゝに從つて活動する者である。そこで其の本能或は本性とは、人間の眞我で、眞我は物質的である。物質的以外に『我』と謂ふべきものはない。靈魂であるの、智であるの、ヤレ良心であるのと言ふは、ザラフストラの敎へぬ所。此肉體其物が『大我』である。

『目醒めて知れる者は言ふ、我は全く肉體のみにして、此他何物も無し。靈魂とは體內に於ける或物の詞なるのみ。』

とニーチエの語にあるは、正しく肉體的人性を以て、大我と見做したことを證明する。

『吾が兄弟よ、爾が思想と感情との後には力ある主人立てり、これ

未知の賢人にして其名を自我とぞ呼ぶ、爾の體に彼は住す、彼は爾の肉體なり、爾が肉には、爾の最上知恵よりも、更に大なる理性あり。』

即ち肉體の性質が、萬物の主人であつて、此他一切の事理は、皆其物の奴隷である、そこで其肉體的本性は最も自由なる活動を試みねばならぬ。

『吾は自由なる精神と自由なる心とを持せる者を愛するなり。』

とはニーチェ其人の語であつて、所謂超人間は、物質的本性に從つて、自由に意志を活動せしむる者である。去れば人間として、經驗中の最大時機とは、如何なる場合であらうか。言ふ迄もなく、從來の思想から見れば、尤も卑むべき時である。即ち世の所謂幸福も、知識も、道德も、悉く一文の値打なしと考へらるゝ其刹那こそ、最

上最高、三千世界にも二つと覓め難いものである。高山君始め記者の名辭を借用するならば此刹那こそ、美的生活と申すべきであらう人間の性質を研究することは、實に容易ならぬ大問題であるが、吾人の目的のためには、左したる必要もないに困つて、大づかみの所で止めて置かうと思ふ。偖て人間の性質を區別せば、第一に精神的第二に肉體的の二つが有ることは、誰れしも承認するであらう。そこで其各の本性を滿足せしむる所に、快樂が伴ふことも、亦疑ふことが出來ぬ。然しながら所謂肉躰的本性といふものは、又の名動物的本能性と稱すべきもので、ニーチェは其本性の自由なる發進が、人間本來の目的であると說き來つて、精神上の滿足は、何等の値打も莫いもの、否却て人間世界を腐敗せしむるものと結論した。衰弱した人間が、精神上の滿足を追求するので、其が爲に出來た敎理は

健全にして強大なる本能を壓迫する。希臘や羅馬の時代には、動物的本能が十分に發展するの餘地があつたが、ナザレで生れたイエスといふ馬鹿者が、隣人を愛せよ、悲む者は幸なりなどゝ、途方もない天堂地獄を說き出してから、强健の本性ある者は、弱者の爲めに負けた。强者は多數の弱者の爲に壓倒されて、其意志を活動せしむることが出來ぬ、これ此世には平凡煩瑣の事ばかり多い所以であると。

ニーチエに從へば、悲しや知識や道德やは、皆意志の奴隸である。意志は動物的本能の無限の發進のために、活動するので、其方便として智識を利用するものであると。道にショーペンハウエルの流を汲んだ丈に、意志を人間意識の親玉とされた。所がショーペンハウエルと違うて、ニーチエは意志の肯定、即ち其發進、自由放恣なる

進行を以て、人生觀の基礎とした。而して一方では、客觀的智識を否定して、宇宙はコスモスでは無うて、ケオスじやと大膽なる斷定を下したのである。從つて義務といふことは、存在しなくなつた。確實な智識は何處に存在する乎。畢竟ずるに智識は意志の活動を翼けるために存在するばかり。理想などは意屈地なしの囈語である。義務は意志と自我との間に存在する許りで、聖人君子の喋々しく述べ立つる義務は、全く無意味のものである。所謂超人間は、世俗の義務を滅却して、高く不道德世界に翺翔する一種の人間であると。

ニーチエは鷹の爪と毒蛇の牙とを持つて、

「見よや、吾れ爾に超人間を語らむ。超人間は地の意義なり。爾の意志は言はむ。超人間は地の意義ならざるべからずと。兄弟よ、吾れ爾等に薦む、地に忠實なれ而して地に以上の希望を說く者を信ずる勿れ、彼等是を知るも知らざるも、彼等は毒害者なり」

と凄じい勢で述べて居る。さて〳〵懼しい哲學もあれば有るもの。吾は『最初の不道德者』なりと公言して、天下を睥睨したニーチエの、根本思想は實に斯の如く、物凄い、恐しい者である。

然ちば其ニーチエ説は、美的生活を説明する憑據と成るであらうか。自由本能、動物的本性に從つて、意志が活動すれば、美しい姿となるとは、矛盾なく立言し得る所であらうか。窃盗するも、强盗するも、姦淫を行ふも、殺人罪を犯すも、これが自分の本性の然らしむる所であるとの理由があつたならば、輙ち是れ美である。盗跖や五右衛門の徒輩が、盗偸の目的のために、あらゆる科學、倫理學哲學を研究して、催眠術や、鍵の破り方を究め、是を惡意志の奴隷として使用するならば、ニーチエ及び其敎徒は、あゝ美しい生活である、見事の生涯であると褒めねばなるまい。

苟しくも動作的本性の滿足を以て、美的と呼ぶならば、從來美的として知られたる一切の生活とは全く正反對の生活を以て、美と謂はねばならぬ。去れば病床の夫を振り捨てゝ、妾の本性は健康體の男が欲いのでござんすとて、色男を尋ね廻る女が、美的生活を送るので、身を殺して看護する女房は、此上も無い阿房である。楠正成は湊川の戰場から、逃げ出してこそ、美的生活を送つたので、討死にしたから、却て醜的生活を送つたと、謂はずばなるまい。何とならば正成が討死を遂げたのは、人間本性の滿足を得たものでない。苟しくも人と生れた以上は、肉を切るのは痛い、死ぬのは厭だ。而して是が動物的本性で其本性を滿足せしむるために、意志が智識を供に連れて活動し、チヨロ〳〵と遁れ去るが、美的である。淸盛入道が、其子重盛に、あれ彼方の敵は强いぞよ、成たけ弱さうな處

に向へと戒めたは、美的行爲で、重盛が敵の强弱を見て進退するは武士の恥と思惟して、斷然進軍したのは愚の至り。また壇の浦で、逃げ損なつた宗盛は、美的生活を遣り掛けて、不幸にも失敗した男である。

假りに人間の對人間的生活狀態を、消極的と積極的とに區別して論じて見やう。行爲の憑據は、理性を無視した本能であるが故に、其滿足其進步を阻害する者に對しては、消極的態度を取るが美的であつて、其反對に、本能の發展し得べき場合には、無限に進み行くが亦美的である。弱者は、之を奴隸として追ひ、强者と見たならば、之を避ける工夫を廻らすが、所謂美的生活である。

更に個人の生活に就いて見るも、己が本性（動物的或は肉體的）を滿足せしむるが美である。顏回が裏店で、糠を嘗めて勉强したの

は、頗る馬鹿げた話で、之に反して自分勝手に動物的本性や慾心を出來得るだけ滿足せしめた者が、美的である。

要するにニーチエの哲學を根據とすれば、人生の目的は肉體的快樂を追求するに在つて、其快樂を穫た者が、美的生活を送つたのである。換言すれば、從來の思想にては、最大惡人と謂はざるべきものが、美的生活を送つた人間であると、結論するが當然である。然るに記者も高山君も、此結論には至らずして、却て楠公や菅公や孝女や烈婦やを美的生活を送つた者と說明された。洵に自家撞着の議論と謂はざるを得ない。

斯く論じ詰めたならば、記者は定めし知識奴隸說を取り出されるであらう。意志は元來、智を奴として使うて居る。其智を方便として、己が進路を定めるのである。肉體の慾ばかりを遂ぐるならば、

必ず肉體を傷くることに成ることを、知識に依つて知るが故に、無法の慾を節減する。また楠公とても湊川で死ぬ法が、得策と考へたから、花々しく討死したのであると、説明されるであらう。若しも記者にして、斯樣な論を立てられるとしたならば、余輩も亦數言を費したい。

元來意志が主人公で、智は其奴隷であるといふは何で定められたものであらうか。理を論ずる場合に當つて、斯る詩人の言ひ草を以て論據とするは、尤も忌むべき事であらう。吾人の意識其物の中には殿樣たる意志と、家臣たる智識とが存在するとは、如何なる根據から割り出されるのであらう。勿論吾人の意識は、感覺の集合ではない。即ちヴントの云へる如く、受動的及び能動的の二面があつて、其能動的方面が心の特色である。然しながら此點から、直に意志の

方面を以て、全心の主人公と推論することは、到底能はざる所である。吾人の解釋では、智と情と意との三者は、互に兄たり難く、弟たり難く、決して分離すべからざる者、即ち意識其物の三方面である。故に三者は互に補佐し合うて、一を缺けば、他の健全なる存在を見ることが出來ぬ。

吾輩は意志と智との間に、軒輊ありとは、思想することが出來ぬ。然し假りに一歩を讓つて、智は意志の家來であるとするも、尙ニーチエ的議論に矛盾が生じて滅せぬ。既に意志は動物的本性に對して義務を有する計りであるのに、茲に至つて、智の助力を受くと言はゝ、これ正しく智の價値を承認したもので、前に述べた通りに、人間本性の滿足は、美的生活に成るといふ基礎は、全く壞れ去つたものと謂なければならぬ。

ニーチエ哲學を基礎とすれば、自重、忠義、孝行、愛情、慈悲、忍耐、克己などの所論倫理的觀念を口にする事が出來ぬ。從つて是等を、一個人の本性中に疊み込むことが出來ぬ。若しも正成の戰死が、正成其人の本性に生れ出たものとすれば、これは正成の本性中に、精神的、或は理想的、或は知識的方面を認めたもので、既にニーチエの立場を離れ去つたのである。而して其精神的方面を指して動物性を滿足せしむるための意志の從僕と見做すは、前記の通り詩人的譬喩で、冷かなる理論界に在つては、兩者は平等である事を、主張せねばならぬ。更に詩人的譬喩が立場なりとせば、其反對に、智は盲目的意志を、啓發するものであるから、智其物が主權者で、意志は手足の如き家僕であると言ふも、何等の批難を受けべき筈が無い。

要するにニーチエの哲學は、美的生活（衆人の承認する）を説明するに不足のものである。故に其説明のためには、ニーチエ以外の立場を取つて、知識上或は道德上の理想を立てなければならぬ。即ち其等理想に對する義務を感じて、其義務のためには、動物的本性の要求をも擊退し、刺殺して進行する所が、價値のある行爲で、其行爲が習慣的となつて連續する所、即ち美的生活である。予輩は、自身の見たるニーチエ哲學は、美的生活を説明するは、全く不足のものであることを錄し終つた。尙記者の御説明があるならば、謹で承りませう。（三十四年讀賣新聞）

不自然は果して美か

（文學士佐々醒雪君に與ふ）

文學士佐々醒雪君は穩健なる批評家なりと言ふ。去れど其の穩健は、寧ろ空漠たるが故に、予は是れを呼んで十六七世紀の評論と言へり。然るに氏は近刊の『文藝界』誌上、予に對して答辯を試みられたり。さはれ予は氏より文學史、美學、レッシングの講義を聽かむと欲したる者に非ず。而して今は其の重要點に對して、一言を呈せむと欲す。

氏曰はく、不自然を描くべしと。予は其の不自然なる語の意義不明なるを云ひ、且つ日本の寫實派小說は、寫實派の眞義を悉知した る迄に進まざるが故に、今日淺薄なる理由を以て是れを排斥するは誤れりと言へり。必ずしも「時代後れ」と罵倒したるに非ざるなり。然るに氏は此れ等の點には考慮する所なく、再び不自然の美を說けり。

氏は寫實に代ふるに現實なる文字を以てせり。これ既に奇なる代用に非ずや。寫實は方法なり、現實は事實なり。そは左も右も氏曰はく、現實は「空想の所產にはあらず」現實は因果律に束縛せられ、次郎は太郎たること能はず、人は窮窟千萬なる囹圄の裡にあるが故に、自由を欲す、「若し詩的同情にして……人をして因果律をさへ脫却して、よく死者を蘇生せしめよく弱者を優勝者たらしむるあらむか、これ囹圄の人をして暫く天縱自在の神たらしむるにあらずや」と。

吾人は斯くの如き曖昧なる理由を以て、寫實派を攻擊するの勇氣なし。先づ問はむ。氏の所謂不自然とは如何なる意義なりや。次ぎに問はむ、自由を怡ぶは、精神上の自由なりや或は物質上の自由(自然律に束縛せられざるもの)なりや。予は必ずしも寫實派を辯護す

る者にあらず。而して亦其の一派の病弊を知る。只雪醒君の論難が餘りに曖昧なるが故に、現實主義のために辯解せむと欲す。

氏の不自然といふ文字には、二樣の義を含む。第一には物質世界を支配する因果律以外の物質的、或は肉體的狀態なり。信乃夕霧を例として、死すべきを生かし、死者を蘇生せしめ或は魔法の世界を現出する所に、美ありと論ぜるを看れば、余が第一の解釋は、決して不當ならざるべし。即ちロマンチシズムの或る一面を不自然と稱して、茲に美ありと論ぜるものなり。然れども問はむ、その不自然は果して美なりや。荒唐奇怪の作物、或は作物中の奇怪に、美ありとせば、文學史上に於ける古今の作物は、爲に價値を失はむ。何とならば此の意味に於ける不自然を描きて、永久の價値ありとせらるゝ物を見ざればなり。若し之れありとせば、そは全部の美相のために、

瑕瑾として顯然たらざるか、然らざれば好奇心を以て價値判定の憑據とする一部の讀者間に喧傳せらるゝに外ならず。更に斯くの如き不自然を持つて價値ある物ありと雖もそは不自然其の物に美あるに非ずして、其の寓意的なる點、その表象的なる點に不滅の光輝あるなり。ダンテの大作、沙翁のマクベス中の妖女、或はテムペスト、ガリヴアー漂流記、ゲーテの傑作、アランポーの怪談、近くはメーテルリンクの作等にして、不自然ながらも、永遠の美的價値を失はざるは、不自然の內に、或る高遠なる意義を表言したるが故に外ならず。然るに唯不自然を以て美とせば、尤も不自然なる講談物は、最も美なるものならざる可らず。これ吾人が表象的或は寓意的意味以外に於いて、文學上に不自然の入るを不當とする所以なり。

第二に氏は不自然と超自然とを混同す。吾人何ぞ超自然を排斥す

べき。然れども超自然は、現實を離れて、幾許の意味を有するか。現實世界の研究を離れ、現實と遠かり、現實と反對して、何處にか理想主義は成立するぞ。リユーキスは予が言はむと欲する所を言へり。曰はく、

『詩的心意(マインド)は、普通の心意が平凡に解說する細事に、高尙にして感嘆すべき動意(サゼッション)を見る。而して理想派の眞義は最高にして、尤も感動すべき形に於ける此の現實觀に在りて、現實より遠かり或は之れに反對せる或物の觀(ヴイジヨン)に在るに非ず』(ゼ、ブリンシプル、オフ、サクセス、イン、リテラチユアー第三章第五節)

現實に忠なるの後に、不易の理想的作物出づ。沙翁の作が最も現實的なりと稱せらるゝは、今更言ふ迄もなし。又詩歌たると繪畫彫刻たるとを問はず、大作と稱せらるゝ物にして現實を基礎とせざるもの何處にかある。超自然は自然と衝突せず。否自然の研究進んで始めて超自然の意義確固たり。即ち智的方面ある超自然にして始めて深意あり。歐洲の文界が、寫實主義を棄てゝ、理想主義、或は新ロマンチシズムに轉じつゝあるは、決して現實を棄てむとするものに非ず。トルストイの作、ズーダーマンの作、或はシエンキヰチ、メレヂユコスキーの歷史小說等、皆な事實、現實を其として、其處に理想を表さむとす。超自然主義は可なり。然れども其の爲に漠然不自然を作れと言ふは、餘りに大膽なる論法にあらずや。

氏は因果律以外の天地を作れといふ。然れども是れ亦朦朧たる說明に非ずや。吾人は固より自由の天地を愛す。現實世界を去りて、『桃源洞裡太古の人たらむ』ことを希ふ。されど其の自由は、吾が肉體の自由なりや、或は精神の自由なりや。氏は一面に於いて其の

第一義の不自然に此の自由ありと認むるが如し。即ち物質的自由を描けと言ふに外ならず。淺薄も亦甚しからずや。偶然の出來事、或はあり得べからざる事を造つて、自由を示せと論ずるは、人間の欲求は單に體質の自由なりと見たるものに非らずや。若し此の意味の自由を許せば兒雷也豪傑物語を以て大作と言はざる可らず。氏以て如何となす。

吾人の望む所は精神の自由獨立なり。「物質文明の世界」に屈從せざる精神の獨行なり。理想の勝利なり。吾が肉體に現るゝ行爲は、因果律に束縛せられて、當然の果を得るも、精神的理想が、此の狹隘なる獄牢以外に獨立する所に、大自在あり。釋尊は涅槃に入るも精靈は獨立す。これ悲劇の成立する所なり。理想と現實との衝突より、理想の勝利に終るもの、これ悲劇の妙奥なり。讀者の之れに接

して快感を覺ゆるは、其勝利を見たるが故に外ならず。これ余の贅言を俟たずして明かなり。されど斯くの如き結尾は、現實世界の研究を措きては到底望み難し。又此れが爲に殊更に不自然を畫くの必要何處にかある。若しも詩人の眼を以てすれば、尤も卑近なる者の裡にも、理想の勝利を見、且つ之れを現し得べし、否現實を覗はずして、理想の成立は望むべからず。現實を知らずして、理想の自由を追ふこと能はず。

醒雪君は、漠然たる意味に於いて、不自然を說く。これ予の氏が意見を採らざる所以なり。若しも現今の作家に向つて寫實の弊を說かむと欲さば、明瞭なる論法を以てせよ。

更に吾人は言はむ、吾が小說界は、未だ充分に寫實主義を咀嚼せず。所謂寫實派とは何ぞや。皮相の模倣に外ならざるにあらずや。

固より歐洲の一派にも此の弊あり。されど寫實派の特色は、事物の主脉の研究にあり。ダーキンの進化論或はロムブロゾーの犯罪學、或は病理學、或は心理學等の科學的思潮に浴して出でたる文學、即ち寫實派なり。其の弊として或は科學を誤解したるもあらむ（ゾラの如く）或は事實其の物に束縛せられたるもあらむ。これゾラの弟子たるエイマン、モーパッサン等が、遂にゾラを棄てたる所以なり。然れども現實其の物の研究は、決して等閑視せられず。例へばダンヌンジョーの如き其の例なり。飜つて吾が小說界を見るに唯寫實派の寫眞的方面を捕へて、能事終れりとす。この時に當つて、漫然不自然を說く、危害大なるものあらむ。吾人の見る所を以てすれば、先づ寫實の本義を明かにして、後に超現實の眞如を語り、而して現實の裡に或物を望むを以て至當とす。形骸の研究は實の寫實主義に

あらず。去れば吾人は形骸を描きて滿足する作家を非難すると共に、之れを排斥して曖昧の言語を以て直に不自然を說く者をも、謬れりと謂ふに憚らず。

最後に一言せむ。氏は予を指して、小說中に、人格の變遷と發達とあるを解せざる者なりと言へり。去れど予は、凡人が非凡人となり、非凡人が凡人となる、など言ふが如き、當り外れの無き文字を以て、複雜なる人格の變化發達を解かむとする人を指して、氏の如く言はむと欲す。これ善人が非善人となり非善人が善人となると言ふに何ぞ異ならむ。念ふに斯くの如き評言は、京傳、種彥あたりの所謂不自然なる作物に向つて放てば尤も適當ならむ。（三十五年十二月太陽）

自然主義に就いて

（劒南道士に與ふ）

曾つて讀賣紙上に劒南道士の自然主義論あるや、余は之れを要領得がたき論と言へり。これに對して道士は再び說を成して曰はく、人間の本性問題を研究する前に當りて、先づ人間は自然の隷屬たるか、或は超自然の或物を有すかを研究すべしと。更に別項に於いて左の如く言へり。

吾人は既に外的觀察に『人』を存在の狀態に視て之を自然と見做し得べきも內的觀察には其中心の活動に視て之を超自然の志ありと說けり、既に超自然の志あるが故に、自然に從はずまた自然の制約を脫せんとし又自然のまゝに從つて榮枯生死する能はず或は又榮枯生死を敢てす、物の自然に從ふて行動するが所謂自然主義にして、物の自然に從ひ又は之を從はせて行動するは所謂自然主義に非るべし、此點より觀て吾人は所謂自然主義を花の開落主義なりとこそ言ひたれ。

予の無能力なる再び要旨を捕ふこと能はざりき。惟ふに氏は、自然主義を解して、人の物質的方面に於けるものと見做し、其の傍らに、自然よりも超越せる性ありと說けるものならむ。若し果して然らば、氏の自然主義なるものは、自然なる文字に拘泥したるものと言はざる可らず。これ氏が、此の問題の討究の前に當りて、人は自然の產兒なるか否かを檢覈せよと言へるにて明かなり。予自身も亦此の誤を爲せり。

自然主義は本性問題なり。自然性とは、必ずしも物質的刺激によりて動く性質を指したるものにあらず。ただ今日の煩瑣虛妄の社會は、人間の本性を蹂躪す。この故に人は須臾らく本然の性に從つて虛妄を退けよと言ふが自然主義なり。されば其の本性を自然的と見るも、或は超自然的と見るも、そは今の問題には關係なし。又本性

の研究を進めざれば、人が自然界の奴隷たるか否かは知り難からむ

道士は本性問題の前に自然對人間の問題ありと雖も、その問題こそ本性の起源問題の解決を俟つて定まるべきものなれ。而して自然主義の問題は、本性の起源問題にはあらず。內容問題なり。

ルーソー一派の說より今日に於ける自然主義徒は、各其の內容を定めて、これに從ふを以て自然主義とす。而して其の說相合せざるが故に、予は『自然主義とは何ぞや』との疑問を揭げたるなり。若しも道士が、予に向つて、物質上、或は肉體上に於ては、物理界の原則に從ふを以て、自然主義とすとの解答を與へたりとせば、予亦何をか言はむ。そは自然主義の問題以外の解釋なればなり。

劍南道士は、大局に眼を注げ、煩瑣なる學究は無意義なりと論じ、更らに十月十九日の讀賣日曜附錄に於いて、早稻田一派の弊は、懷

疑的、穿鑿的、理屈的にして、誠實なる靜存的信念を閑却するに在りと言へり。去れど吾人は言はむ。懷疑的、穿鑿的、理屈的にあらずして、いかでか靜存的信念を造り得べき、復大局を看取し得べき。吾れ等の學究的なるは順序ある階段を踏むのみ。而して學究と達觀とは衝突せず。

釋迦が大悟徹底せるは、非常なる惑疑と穿鑿との結果也。耶蘇の信念亦かくの如し、トルストイの今日、亦幾多の研究を經たる結果なり。若し結果より見れば、禪味の如きものあらむ。されど其は微細なる研究を過ぎて始めて確立したるものなり。吾人は研究を以て一種の煩悶とす。而して其の研究なくして直に極意を捕へむとするの勇氣なし。何とならば、決して捕ふること能はざればなり。

吾人は言はむ、學究を好まざる人は、到底歐洲の文藝或は思想界

を見るに堪へざるべし。何とならば彼れの直觀的、神祕的學說すらも、吾が今日の學究的よりも更に學究的なればなり。若しも吾れ等の學究的、懷疑的、穿鑿的態度にして、弊害なりとせば、先づ之れを語る前に、これを破るだけの眞理を與へよ。由來皮相の研究を以て足れりとする此の國にありて、學究と名付くべき程の學究なき今日に在りて、古聖が進路を誤認したる說を立つるは、吾人の遺憾とする所なり。吾れ等は、更に緻密微細の學究を企つべし。

（三十五年十二月太陽）

文藝觀畢

明治三十八年八月二日印刷
明治三十八年八月五日發行

文藝觀
價三十五錢

著作者　長谷川誠也

發行者　東京市本郷區本郷四丁目五番地　清水金右衛門

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

發兌元　東京本郷四丁目五番地【電話下谷二〇二九番】　文明堂

不許複製

近刊豫告

文學士 常盤大定著
向上の大道
郵價七十錢 郵稅十錢

文學士 清澤滿之著
佛教講話
郵價三十五錢 郵稅四錢

文學士 遠藤隆吉著
國家論
郵價二十二錢 郵稅四錢

坪內孤景遺稿
宗教と文學
郵價八十錢 郵稅十錢

東京文明堂藏版